

横須賀町史別冊

横須賀の遺跡

愛知県知多郡横須賀町

序

今回、編纂中の本町史別冊として「横須賀の遺跡」が刊行され、四千年前、五千年前の非科学的な説話のみに依つて埋められていた郷土史に考古学的確証が与えられ、本郡最古の人とされている縄文式文化人が、本町にもいち早く大字大田字高ノ御前（木川）に住みついていた事を知り、やがて農耕の進歩や集団生活の拡大などにつれて、海岸近い丘陵や谷の奥などに住んでいた人々が、漸次平地へと進出して行つた弥生式時代に入ると、その遺跡を大字高横須賀字柳ヶ坪に見ることが出来ると共に、社山古窯跡に依つては、鎌倉室町、世に云う中世暗黒時代の本町が光明されるなど、郷土再認識の戸ようやく高からんとする際、本書発刊の意義は極めて大きく、我々の祖先が日々營々と続けて來た民俗文化の旅を振り返りながら、新しい視野から郷土横須賀を俯瞰してみると、必ずや学ぶべき何ものかを撰み得るであろう。ともあれ、次ぎ次ぎと新しい文化を創造しつゝ、氷い風雪を歩み続けて來た祖父達の尊い姿に、私たちは秘められた幾多の史実を知り、これを現世の教訓と仰ぎ、いわゆる「温故知新」愛する郷土「我が横須賀」を史に強く更に大きく育て日覚しい發展を期したい——と念願するや切である。

昭和丙申春

知多郡横須賀町長
横須賀町史編纂委員長

白羽清一

例　　言

一、本書は、愛知県知多郡横須賀町の町史別冊として編纂したものである。

第一部は、横須賀町の古代遺跡についての概説であり、第二部は、横須賀町史編纂委員会がおこなつた愛知県知多郡横須賀町社山古窯の調査報告である。

二、本書の執筆は次の通りである。

1. 第一部および第二部の第一章・第二章・第三章・第四章は、町史編纂委員の杉崎章が筆をとつたものである。

2. 第二部第五章の考察については、社山古窯の調査に参加していただいた榎崎彰一・田中稔・久永春男の各氏より、原稿をいただくことができたので、次のような分担とした。

一 構造論

榎 崎 彰 一

二 古瓦について

杉 崎 章

三 山坏・山皿

田 中 稔

四 社山古窯の歴史的背景

久 永 春 男

横須賀の遺跡

本文目次

第一回 古文書の遺跡 生道跡 墳塚	第二回 古窯 古窯の経過 道跡 窓日誌	第三回 古窯 古窯と地形 道跡 窓日誌	第四回 古窯 古窯の構造 道跡 窓日誌	第五回 古窯 古窯の構造 道跡 窓日誌	第六回 古窯 古窯の構造 道跡 窓日誌	第七回 古窯 古窯の構造 道跡 窓日誌	第八回 古窯 古窯の構造 道跡 窓日誌	第九回 古窯 古窯の構造 道跡 窓日誌
----------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------

6

社山古窑出土古瓦
瓦当状况·出土古瓦

七

第1圖 橫須賀町地形・遺跡分布圖

卷八

第4図 柳ヶ坪遺跡発掘状況

125

第7回 岩屋口古墳の横穴式石室

三

第9圖
社山古窯附近地形示意图

5

第12回

六

第15圖
社山古窯出土・軒丸

七

第18回
社山古窯出土・鬼

10

第20回
御林古窯出七の軒丸瓦村よひかま山古窯出上のかめ父様
製福寺および論田古窯出上の古美唐草文軒丸瓦

答

第423回 各地遺跡出土の古瓦

三

第26回 大アラコ古窯出土の壺詰および破き同文機

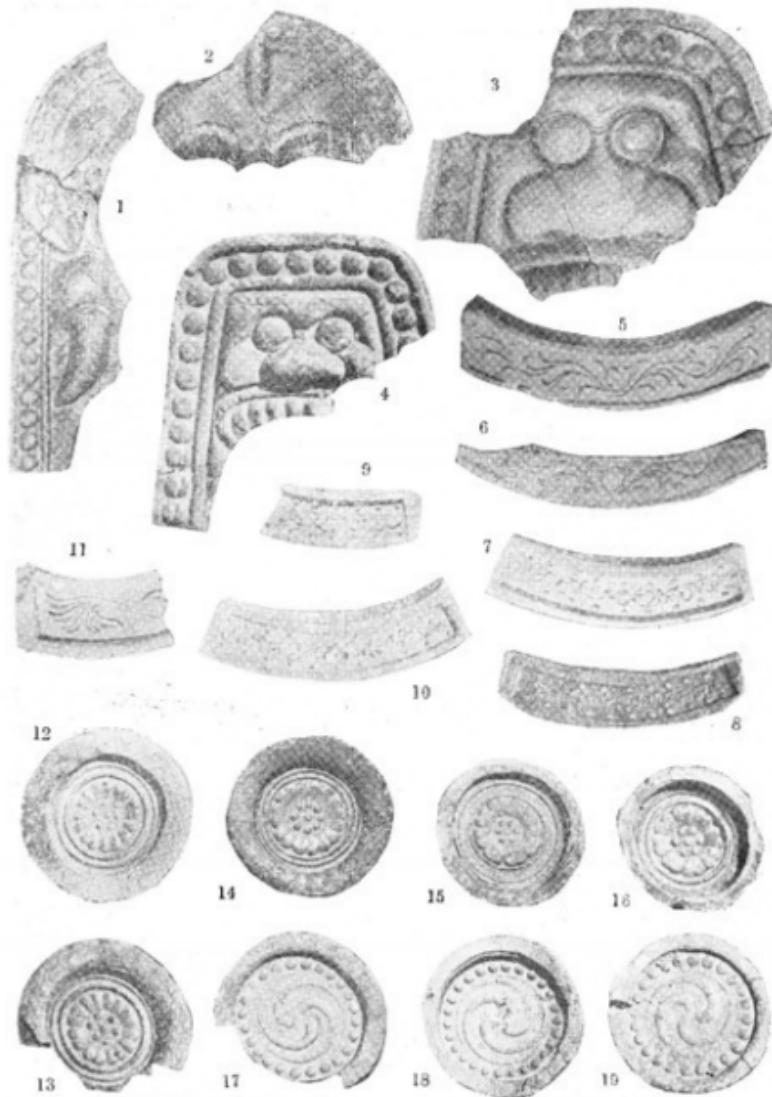
第1図 横須賀町地形・道路分布図 (五万分の一)

たかのござん やながわ

- 1高御前、2脚ヶ坪、3四川向、4東畑
5前畠、6樹木、7岩塙口、8王塚
9朝迦神堂、10掘切、11御亭
12宮西、13漁脇、14蟹福寺
やしらやま
15社、山、16笠ヶ谷
らんぐでん
17論田、18躑躅古戸
ね
根、19冬至池
あふみかわもち
20南面持



圖版第一



社山古窑出土古瓦

1~4 鬼瓦、 5~11 斜平瓦、 12~19 斜丸瓦

図 版 第 二



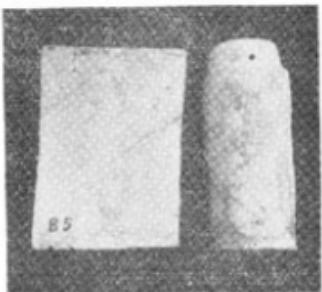
A 区床面 I



A 区床面 II



A 区東壁層序



(右行上より) B 区床面、煙出し道構、丸瓦・平瓦

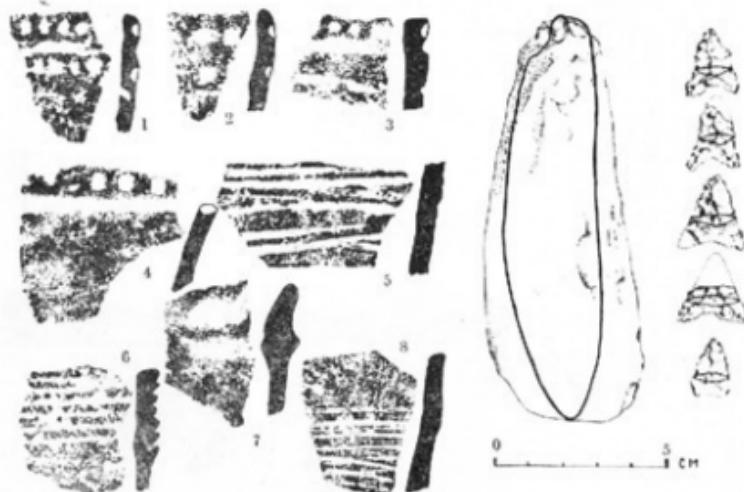
第一部 横須賀の遺跡

一 繩文遺跡

私たちの町・横須賀の低地がすべて海中に没し、伊勢灘の波浪が段丘面をじかに浸食して、さらに尻尾谷の奥へ深く侵入し、加木屋の向山台地から上野町駿馬附近までが、かつて海であつた時代のあることは、だれもが想像していることであり、事実、向山台地と加木屋の本郷部落の谷で試算してみると、表土の下は黒光りのする黒泥土の厚い層となり、さらにその下部からは、谷の奥まで海がはいつていたころ堆積された海成の砂層があり、ところどころに貝の混入がみとめられる。

こうして海のいりこんだ地形が約四千年前までの姿であり、知多半島にはこの時代すでに多くの住民があつて、東浦町人浦貝塚・知多町南柏谷の森西貝塚・同じく大草の東畑貝塚など、海岸線から相当はなれた台地の端に貝塚が形成しているのであるが、横須賀の地域では現在までのところ、こうした遺跡を確認していない。そしてこの横須賀町はじめで住民の足跡がみられるのは纏交晚唐の頃であり、谷の奥はもちろん大田・高橋須賀・養父の砂州もようやく地上に姿をあらわして、現在の町の地形がほぼできあがろうとする時代であった。

明治の終りに下村武一郎氏が知多半島の遺跡を調査されてその地名を人類学雑誌に報告されているが、この地域では大田字高ノ御前地の繩文遺跡と加木屋字向山の石器散分布地がこれである。いずれも谷に面した台地の突端に位置して狩猟民の居住には多くの生活条件をそえた好適の地であった。両遺跡とも久しくわれ去られて地點も明らかでなかつたが、高ノ御前地跡は昭和二十八年秋に横須賀中学校跡上クラブの手で再発見され、土器・石器など多くの遺物(第2図)が採集されている。私たちの試算地点ではすでに条痕文が支



第2図 高ノ御前地跡出土・土器拓影、石器実測図

配的となつてき

晚期後葉のもの（
第3図、4-18）

であつたが、表面

採集では半剖竹管

による刺突文をも

つたもの（第2図、
1-3）など、晚期

初期頭にまでか

のばる資料がみと

められている。し

かし一方の同山石

燃散布地に

は、地番地點など

今なお不明のままで

にのこされている。



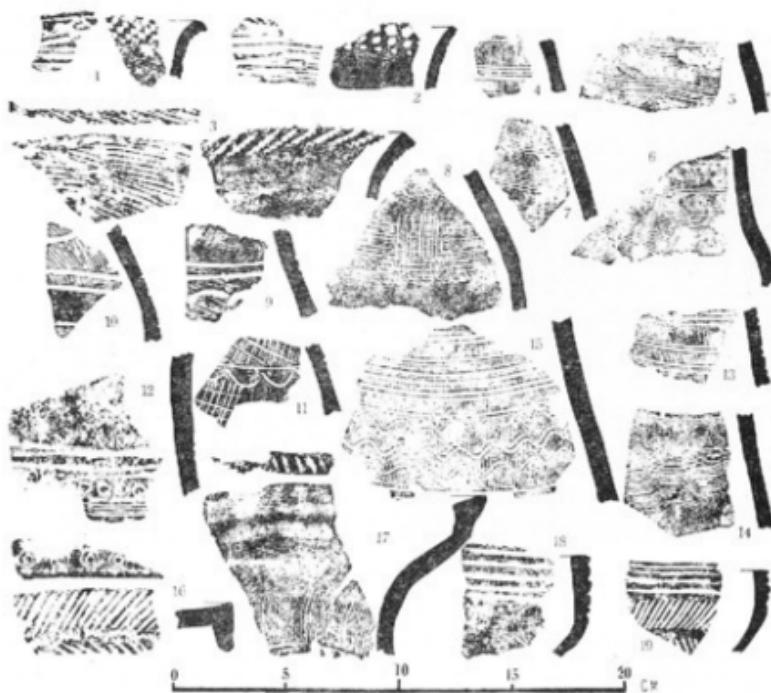
第3図 高御前遺跡発掘状況

種文晚期の高ノ
御前の人々は生活
の基盤を採集經濟においていたのであるが、一方では粟・稗のよう
な畑作農業はじめていたといわれている。やがて大陸より稻の栽培
を中心とした水田農耕の文化が伝えられるにいたり、この地域の
人々は高ノ御前以来の畑作農業の伝統とともに、砂州と砂州の間に
くは地・谷の出口を砂州でとめられた後背湿地など沿地の多い自然
の地形にもめぐまれながら、急速に歩生文化・農業社会としての体
制をとつてえてきた。水田農耕といつても弥生時代の技術は低湿地
を利用した自然灌漑の農業ではあるが、青銅器・鉄器などの金属器

の使用など、新しい生活様式がもたらされて生产力は飛躍的に高まつて
きた。この時代の代表的遺跡が櫛ヶ坪遺跡であり、去る昭和二十七年六月に櫛ヶ坪中学校によつて発掘調査（註1）されてい
る。櫛ヶ坪遺跡は海岸に面した冲積平原の砂州上に後背湿地の砂州上に後背湿地に沿つて立地してお
り、周辺は表土十メートル二十厘米の下に約二十厘米の泥質土層があるが、出土物の中に弥生中期のはじめの土器から須恵器・山杯まであるの
で、この貝殻は中世において二次堆積された擾乱層と思われる。この
擾乱貝殻の下に弥生式土器を包含する二層の有機層がみとめられ、
上層の黒色砂層が約五十厘米、下層の黄褐色砂層が約二十厘米、ついで
砂山の砂層という層序を示している。また砂州の中央部の地点では、
貝殻はみられず表土につづいて弥生式土器をふくむ二層の有機層となつてゐる。土器の編年上、それとの層序の間に大きな変化が
みとめられないが、この地域で櫛ヶ坪中学校のものとともに繁栄した弥生
中期の資料（第5図）である。遺跡にはこれらの層序をくびき状に

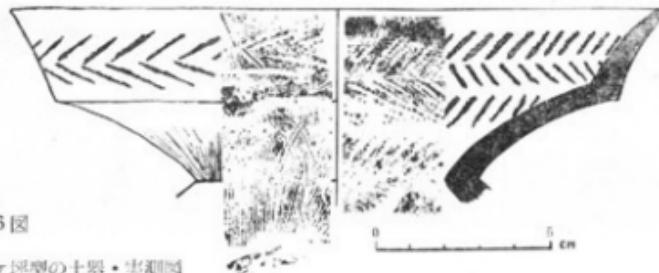


第4図 櫛ヶ坪遺跡発掘状況



第5図 柳ヶ坪遺跡出土・土器拓影

きりこんだタテ
穴の存在がみと
められ、強生後
期のほとんど完
成した土器が多く
出土している。
その中に、棊を
つくつて上方に
櫛が羽状文を
めぐらしている
壺形土器（第6
図）があるが、
この土器は伊勢
湾・三河湾の海
岸地帯で盛行し
て、この地域に
おける弥生文化
後葉の様式とな
つており、私た
ちが「櫛形壺型」
(註2)と仮称亦
しているもので
ある。
この遺跡のは
かにも、同じよ
うな立石環境を
もつ砂州上に跡
生遺跡がづづ



第6回

柳ヶ坪型の土器・実測図

ている。大田の東畠遺跡・養父の西川向遺跡がこれであり、どれもが弥生後期で貝塚はつくつていない。

一方、弥生後期になるとふたたび集落が台地の上にもいとなまれており、高ノ御前の御文遺跡五ヶの前畑・樹木など、地層の不整合面より湧出する泉のある台地中段にたて穴をつくり、谷頭の亂地を水田として利用した遺跡もみられる。

三 古 墳

農業社会が次第に発展してくると、それぞれの社会の有力者たちは、土をもりあげた古墳をつくつて埋葬されるようになる。西暦三四世紀にはじまる古墳時代は、さらに前期・中期・後期と区別されしているが、弥生文化のころ知多半島の中心であつたこの地域にどうしたことか、前期・中期の古墳はみあらなくて、現在しられて



第7図 岩屋口古墳の横穴式石室

るものゝすべては六・七世紀にあたる後期の古墳である。

町史編纂委員会の事業として

高橋須賀の岩屋口古墳の石室が埋没しているのを清掃発掘したが、丘陵の斜面に巨大な石をつぶさずいた横穴式石室をもつた古墳である。古代に土藏の住居になつてゐたといふ伝説を裏付けるかのように、古墳時代をすぎてまもなく山林のつかわれた時代に盗掘されていて、床面から完形の山林とよく炭など多く、その埋葬状況を明らかにすることはできなかつた。しかし石室の築造につかわっている石は天井石が数枚とりはずされてしまつた封土の上にせんざんの杉木古墳とよばれていた。蓋のしげしがあつたといわれるが、大正六年秋に大田より姫島に通す道修理の節にこわされたが碧玉製の管玉・須恵器の如きが出土した。直刀・管玉・須恵器など

がうことができる。

同じような規模をもつた円墳が大田の寺下地内にあり、玉屋古墳とよばれていた。蓋のしげしがあつたといわれるが、大正六年秋に大田より姫島に通す道修理の節にこわされたが碧玉製の管玉・須恵器の如きが出土した。直刀・管玉・須恵器など



第8図 王塚古墳出土・須恵器

類が保管されている。

こうした生産の基盤を農業においていたと考えられる一般的な共同体にたいし、現在の海岸線となつてゐるもつとも新しい砂州上には、古墳時代の終末につづく奈良・平安時代にかけての漁業聚落の遺跡群が、大田の細切・上浜田・下浜田、高横須賀の御亭、横須賀の官西・大門・養父の漁場・禊廻御堂とつづいており、かつての繁榮した漁村の姿をあらわしているが、この集落とかさなつて存在する古墳は、横穴式石室をつくらずに、組合せ式石棺の形でのこされていだ。養父の禊廻御堂遺跡の例は、数年前に破壊され、砂岩質の石材がだされている。

四 古 窯

焼成のかたい須恵器や、質のもろい土師器で代表される古墳時代や奈良時代をすぎると次の時代の遺跡は山杯・山皿を以じるとして発見される。こまかい上墻についての問題は第Ⅱ節において考論されるが、大体は平安朝から鎌倉時代といわれている。これらの土器は、上木工事のおりなど町内の隨所で採集されるが、それはこの時代の集落のあとにはかならない。さらにはこの時代、知多半島には数千基におよぶ古窯がきずかれてゐる遺址がみられる。すなはち、西の丘陵ではこれから詳述しようとする社山古窯群をはじめ釜ヶ谷の古窯群があり、東の丘陵では三ツ池古窯群・大泡古窯群がしられ、そして三ツ池古窯群はさらには諫田・鶴吉良根・北平井の各支群に、後者は冬至池・南鹿持・北鹿持などの數群にわけられている。そして古窯群のつづきは廻丘陵の北方である木田や向山の台地にも分布している。それらの古窯群で燃いている土器の種類は、社山・諫田では古瓦を、釜ヶ谷ではかたくち・大かめを中心として山杯・山皿は副の形で

焼いているが、他の古窯群では山杯・山皿のみのものが多い。

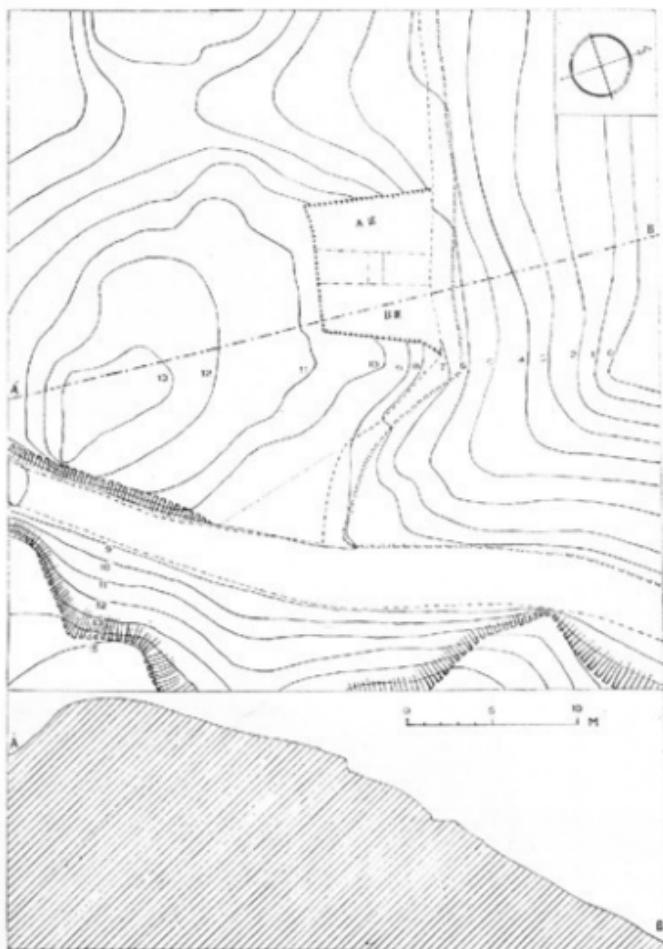
第9図 諫田古窯



註

① ②

杉崎章『柳ヶ坪貝塚』愛知県知多郡横須賀中学校 一九五三年
前掲書ならびに久永春男『東海地域の弥生式土器』(日本考古学講座4)一九五五年、また柳ヶ坪型の名称はつかわれていないが大場義雄『愛知県知多郡豊浜町発見の遺跡遺物』の中にこの資料がみえる。



第10図 社山古窯附近地形実測図

第二部 社山古窯

第一章 位置と地形

横須賀の地形は、海に向つて開かれた沖積低地と南北の方向に平行して走る二つの丘陵よりなつていて、名古屋鉄道常滑線と大田川平野にて分岐した河和線は間もなく西の丘陵を抜けて東の丘陵との谷間に南下していく。電車が西の丘陵をこえる時に小さいトンネルを通るが、社山古窯はトンネルの上の道を進づたいに南へ六百メートルの地城の半峰の一つである雄子山（海拔五九、六米）の西麓にあります。

（註1）は愛知県多那郡横須賀町大字加木原字雄子野百一番地（註1）に記載されている。雄子山西麓の地形につきさらに詳述すれば、西の丘陵の主軸が南北に走つていて、雄子山中央よりやゝ北の山麓からほぼ直角をなし、真西へ支丘（海拔約三十米）がのが西側の谷を二つにわけている。社山古窯はこの支丘の頂上からわざかに下つた北側の傾斜面上に植たわつておらず、道路の中央部で海拔二十五米の高さである。さらにこのあたりの地質について述べば、第三紀新層にあたる猪高層が上層にあらわれており、窯の床面は程々三種の小窓を多くふくんだ黄褐色の砂層となつてゐる。遺跡より南へ十数メートルの地点に掘削があり、断面にあらわれた部分より観察すると、この支丘の地質は全体として南から北へ平均二十八度の傾斜をしており、頂上で地表から約四メートルは窯の床面にまであるが、大体は花崗岩の風化した灰白色の珪砂であるが、鉄分の沈殿のためうすい緑をなして赤褐色、黄褐色を呈する部分もあり、とくに全体として長石の含有が目立つてゐる。その下に不整合をなして尾張寒成層に属する白粘土の厚い層がつづいており、社山古窯が焼をだしていたころ製陶に使用した粘土もこの粘土層と考えられ、この層はさらに相引にそつて北へ下つた道路

附記

普濟寺の横須賀公園入口（詳しくは大字高横須賀字猫狹間と北戸石、大字加木原字西鶴門の三字の境界点）に一面熊糞におわれた一基の小さい石地蔵がある。「誰かゞ供養に建てたものだらう」くらいに謂でる人とはない筈むしたものであるが、これは通い昔からある有名な道しるべ、建立年月は不詳であるが地蔵尊右に「米田小川みち」左に「吉川ちりふ道」と刻まれている、写真右の道路は高横須賀の岩屋口（吉横のあるところ）前から普濟寺南へ下つてゆく往時は北知多を東西に結ぶた一本の重要な道路

（註2）好古の足張御行記にも米田村の

ところに「加木原村を経て横須賀村へ出た」この道あるのみ」とある

この道を南東へ下

り加木原小学校の手前で右折すると

今は通行者もまれで、地蔵尊前に立

つと光芒幾歲、松吹く風に有為転變の世相を透くぶり

返るのみ（横須賀町史編纂委員会）



第11図 旧道にねむる石地蔵

の下の谷に露出している。この粘土のとれる谷一帯を現在も瓦山（註2）と称しており、近年まで瓦をやく粘土を探掘していたものである。現在では遺跡の下部がけずりとられて段をなしているので、古窯が生産に使われていた時代の微地形を復原するのに困難な点があるが、丘陵の上部にのこる猪高懸壁から下畠の尾張次炭窯へ移行する不整台面に近い地點であり、窯より上は傾斜があり窓の下からは角度がやゝなるといつて窓換点に近く立地している。したがつて附近に地下水の湧出する泉が多く、とくに谷の下の湿地あるいは谷頭につくられた池にたよらなくても水場には事をかゝない。日照度・乾燥度についても丘陵の東麓または支丘の南斜面に比してまさつてゐるとは思ひれないが、さらにも風の強さや方向という種々の条件について検討してみると、支丘の北斜面という立地から、北西季節風の卓越する時には相当の強風をうける状態にあるが、それでもじかに海岸に面しているわけではないので、現地に立つてみた場合は想像するような風当たりではなく、窓の燃焼度を高めるためにはかえつてこの程度の風力が必要ではないかと考えられ、この要求があつてこそ丘陵の西麓・支丘の北斜面を利用しているのであつて、多くの条件のなかでもこれをみたすためには日照度・乾燥度の不利などは比較的的に軽く考へられているのであり、こうした例がこの地域でも一般的である。

さらに立地で考へていただきたいのは遺跡と中世の交通路・集落の問題である。私たちが地域の古窯群をもとめて、現在はわれされされている丘陵の道を考へてみると、思いがけない所に石地蔵（第11図）があつたりして而ぬうが、今は草に埋れた石地蔵も、かつては旅人達に長い間憩しまれて来た通しの道で往時街道として栄えていた事をいろいろと教えてくれる。中世・近世における丘陵地帯での交通はすべて峰の上の道路にたより、谷にはほとんど通らしものはない。とりわけこの遺跡の下の谷は深い沼田をなして、現在でも谷の方からはのぼることが不可能な程の困難をかんじられ、社山古窯の時代、遺跡への往来・製品の運搬すべてが丘陵の上の道を利用

したものであろう。遺跡の上の雉子山に立つて社山を中心とした中世の交通を展望してみると、東・西の丘陵とも丘陵の主軸にそつて、その丘の上や中腹をぬうよう古い道が走つておらず、遺跡の近くでは西の丘陵の先端・木田の鶴林寺方面よりくる道が、トンネルの上をすぎ雉子山の中腹を東へまわり竹新田の部落へ入つて来る。そして二つの丘陵を結ぶ道はわずかに一・二本あるのみで、東の丘陵で美女ヶ駒を通り西の丘陵の岩屋口・古墳の南をへて柳ヶ坪などの低地集落にいたる道路は、知多半島の東西を結ぶ幹線である。さきにしるした石地蔵の例（第11図）もその街道にあるのである。

註

①

社山古窯は本来、雉子野古窯と称されるのが正確であるが、私たちが研究の途上にてこの地名に気がついた時すでに社山古窯の名でしられており、社山が地籍をこえた中世以来の通称でもあるので、ひきつづき社山古窯とよぶことにした。

地籍の上での瓦山は、現在ほとんどが水田となつておらず、そこには窯はない。私たちがいう社山古窯をふくめて瓦山と称したのが、粘土のとれる谷にのみ、名が残つたものかもしれない。

第一章 調査の経過

本章は発掘調査の主体となつて参加した横須賀中学校郷土クラブの記録をまとめたものであり、とくに連跡の沿革と第一次調査は、一九五四年に刊行された「社山古窯調査のあらまし」によつたものである。

遺跡の沿革

桂山古窯の造役の意見者であり、それを報告して研究の端緒をつくったのは早川鉄也である。彼の家は山の中の一軒家であり、活動の上に住んでいたといつてもよい位、古窯と隣接している。兎窓が出ていては彼の報告にみよう。「こゝに古窯があり、瓦が出土する」ということは今まで誰れもしらすにいた。つい最近までしつていたのは、私の祖母と父のみであった。祖母の苦いところには、現在と比較にならない程、沢山に古窯があつたそうだ。私の住んでいる家の附近にも古窯がひろがつていたらしいが、誰れも注意しないままに邪魔もの扱いにしていた。こんな昔の話は祖母が生きているからわかつたことであるが、説明がなければ永久にわからないことがある。その後、終戦後の食糧難のころに山が開かれて新しく畑が開かこんされた。その後、へいく道をつづり、幸か不幸か一部が古窯になかろう、道の下におびただしい瓦がおしながされたことがある。後になつて私はそこを掘つてみたが、その中からは瓦をみつけることはできなかつた。その時はそのまま、われさつてしまつていたが、こんなに多量の破片をみつけながら不思議とも思わず、問題をもしなかつた社会のことが残念でたまらない。そうした状況の中で桂山古窯について私がどうして関心をもつてきたかというと、それは昭和二十七年春の柳ヶ坪遺跡の調査が動機である。地下にうもれ

ていて今まで日もくれなかつた十畳の壁紙が、郷土の歴史をしらべるカギになることをおし�られた私たちは、郷土資料にたいする考え方を根本から考へなおしたものだつた。たまゝ私の家でもその話がもちあがり、瓦のかへら便なら家の裏山にもあつたという話がでた。もしやと思つて私は、歴史をしらべるのに必要なものはないかと、もう一度そのあたりをしらべてみたが、すでに楠木におはわされた山の中で何もつかむことはできなかつた。けれどもその後の郷土クラブの討論では、どうしてもだまつておられないで、友達の春田修生・久野寛君に協力をもとめ、再調査の結果、敷片の瓦を免見し郷土クラブで報告をした。この時はじめて古窯の存在が確認され、社山が陽の日をあびてきたのである。(註1)これは昭和十七年も暮れ近いころであつた。早速、早川欽也の案内で現地の野外調査でかけた。参加したものは十一人、鉢巣おろしのきつい日であったが、その日の反省としてもつとも強く印象づけられたのは、透跡発存の問題である。谷のむこうの丘陵にはもつと多くの古窯が分布しているのであるが、砂防・植林の過程で大部分が破壊されおり、今なら透跡の分布は記録できるが、一旦おくればそれだけ遺跡が失われていく現実をみせつけられて、郷土の文化財を守る私たちの使命の大いさをしつたのである。

昭和二十八年の二月、知多占霊調査会といつて古窯の研究をしてゐる人々が、こらへ、この遠路など案内したこともある。ところがその後しばらくの間に、発見をして研究をつづけている私たちも、地七の早川止一氏さえしられないまゝに、遠跡がほりかえされて資料がもたらさられている事件がおり、問題が憂慮される状態になつたまゝで、年をこして昭和十九年となつた。この年の一月に常滑占霊調査会の調査田中治・中沢三千夫の両氏が未町され依頼により現地を踏査収集したところ、兩氏も知多半島の古窯を研究していく総合的な立場から、遠跡のもつ重要な資料的価値を指摘されて、学術調査の早期実施を期待していかれた。やがて同様の趣旨は要望書の形で横須賀市に

町史編纂委員会にもとづけられてきた。横須賀町史編纂委員会では、早速その事業の一つとして調査を計画し、文化財保護委員会に申請（地文記第一六四号）して発掘にかかったのである。

二 調査日誌

第一次調査（昭和二十九年）

三月十五日 晴 中学校の方へきていた久永先生・役場の久田さんとともに社山へ到着したのはもう十時をすぎていた。現地にはすでに役場の岡戸さんをはじめ町の委員の方々、常滑古窯調査会・報道機関・その他の研究者があつまつてみて、山は大にぎわいである。橋崎先生・田中先生も相ついで到着され早速活動を開始した。

まず全体の資料を数量的につかんでいくべきだと考へ、周辺の草刈りをする班と併行して、表面にちつている瓦や山杯などの遺物を粗類別に採集する仕事にとりかかつた。林道にかかる地点と二地点の機械坑よりの



第12図 鬼瓦をいだいて

観察から、一応三基からできている古窯群と假定し、西の方からA・B・Cの窯と名付けることにした。調査はそれらのうち、もつとも破壊のはげしいAの窯・Bの窯の二基を予定し、Cの窯は跡跡として保存することにした。
午後になり、橋崎先生の指導により卒業生の早川欽也、生徒では大森・森岡が手つどつてトランシットでの地形測量をはじめると、もに、ますAの窯から発掘にとりかかつた。——破壊されている所から斜面にそつてレンチを振り、窯にあつたらそれをひろげていこうとする作業である。少し振りていくと頭のかわつている所へ達した。それは昔の地肌で窯の築のくさつたのがたくさんみられた。これからが本物だと意氣込んでかゝつたが、何度、目をみはらしても思うような瓦はでこない。（高橋良輔）——でも破壊坑からみるところすぐ遺物である。明日からは遺物洞をおつて横にひろげることにする。指導にきていた久永先生の宿舎には、加木屋小学校の一室を借用する。

三月二十六日 晴

測量係は今日も橋崎先生の指導で地形測量をつづける。発掘の方は第一日にひきつよいて、Aの窯の床面をあきらかにしていくこと、A・B区で窯のあり方が大体了解できたので、予定したBの窯の調査をはじめることであった。
— Aの窯では山杯がほとんどであり、瓦は丸瓦が少ししてた程度であつた。それでも一番上の方から巴文の軒丸瓦が當時は、皆が歎声をあげてみにいつた。でてくる状態を写真にとるので、移動ゴチをうごかす竹内君も真剣である。僕は鬼瓦の鼻を振りだした。普通の瓦にしては姿であるので、先生にみせねば窯の穴だと大わらいされた。そういうふうに幽がある。（伊藤吉光）——今日からはじめたBの窯では、下村時・下村啓・永島・永井・及川ら八人して分担したが、——私たちの班は八人で、窯の上方に四人、中間に二人、下に二人である。上のものが振りかえした上を下へながすと、下のでは遺物をみながら道の下段へほうりこむのだが、西の窓に一日

おくれているので表上の土取りも大変である。A区からはめずらし

いものがでるらしく、歟所がきこえるがこちらは意氣があがらない。

それでもやがて遺物層となり、窓のたき口近くでは灰がみつけられ、

中央よりは軒瓦のほとんど完全なのができた。文様は唐草であ

るが菊の葉のようである。(下村時康) 最初の遺物層がなくなると、

赤く焼けた廻があり、その下にまた新しい遺物層があらわれた。こ

の日もおわり近くつてから、窓の中段で平瓦がかなりあつて姿

をあらわしてきた。(岡田第二) どれもが文様のないものばかりで

あるが、すこしもかけていない完全な平瓦である。つづいて一枚ま

た一枚とでてくる。平瓦と瓦の間に小さな平瓦の破片がはさん

である。先生方は天然色守の準備をしてみえる。(永島朝泰) —

発掘は毎日できるだけ早くさりあげて、その日その瓦の製造をし

てみえる早川益一郎氏は前に遺跡の下の谷で、瓦をつくる粘土をと

つたことがあるといわれ、この土地の粘土は比較的的に熱に対しても

弱い質である点や、粘土にもそれぞれ個性があり、それが戻所とともに

短所ともなつておつて、現代の瓦を焼く時には、あらゆる気候の変化にもたえられるように、各種の粘土を配合していることなど、そ

の職業の方でなければわからない苦心を説明して下さった。さらに

柳原隆近氏は前に採集してみえる資料の中から杏葉唐草の新平瓦を

持参していた。(下村時康)

二月二十一日(晴)

第一日である。昨日発掘をみにこられた久野九兵衛・加古新平両

氏の案内により先生方は合のむこうの古窯跡の視察にでかけられる。

むこうの論田古窯でも社山古窯と同じ文様の瓦を採集でき、窓の構

造・遺物の相異などについての研究をする上に参考になる資料をうることができた。中字の早川益一郎氏がみえてきか

んに天然色の写真をとつてみえる。——むこうの山からかえつてみえた先生は、まつ先に僕にむかつて「君が昨日こなかつたから、仕事がはかどらなかつたよ」といわれた。やはり力仕事は僕でないと

できないらしい。

青空は雲一つなく、澄みきつた春の空

郷土の知識、僕はまだ何も知らない

澄みきつた頭に、社山で

うんと、知識をつめこんでかえろう

午后は中央より少しだけ、何かコツツというので、苦心して全体

の姿をあらわすと蓮花文の軒丸瓦である。(下村時康) — A区ではほぼ中央の縁で断面をつくり、西半分は端まで調査した。長さは

約十二米、中央はやゝふくらみをもち上下両端はしばれていて窓の規模の全体がわかつてきた。B区では前日の平瓦の山上状況を明らかにしていつたが、林道とのきかい日から合わせれば完全にな

だ巴文の軒丸瓦が四つにわれてできた。A区の巴文と書き方が反対である。

午后は先生方が床面の実測図をつくつてみえるので、私たちは出土物の集計をおこなつた。表面採集・A区・B区と地区別にわけ

て、さらにそれらを種類別にしていくのである。丸瓦は齋先・山环と山腹は底部でぞえだが、平瓦は外角四隅で、楕円にする必要があつた。町役場での議会にてみえた町長森津元治氏と町会議員何知波安兵衛氏が町史編纂委員間戸さんの案内で視察にこられた。

二月二十八日(晴)

最初は三日で調査をおわる予定であったが、しばらくしていくと新し

い問題がつづつとうまれてきた。そこでもう一度計画をたてなおして、再調査することにして、遺跡はしばらく被保有の手配をし

た。発掘の成果が大きく報道されているので、遺跡の安全が心配で

ある。心ない人々によつて遺跡が掘られねばよいが、残された窓・

残した壁など私たちの研究にとつてはかけがえのない資料である。

第二次調査(昭和二十九年)

七月二十六日(晴)

今度の調査の目的は、Bの窓を上端まで掘りのぼり、その全体を

とらえること、もう一つはA・B両方の窓の相互関係をしらべる

ことである。

朝から炎天をおして仕事をすゝめる。待つ程もなく鶴崎先生ついで久永先生も到着されて作業は本格的となってきた。B区の方では前の調査の床面の下に、さらに一層の遺物層があり、そこから大きな鬼瓦があらわれ、一同歎声をあげてよろこび作業も小休止の状態である。前の調査の時にでいる細部片とうまく接合してほとんど完全となつた。

A区では東に残した断面の測図をとるために、田中先生とともに壁面を消去していくが、上端をさらに追求することにより煙出しを確認した。窓からちらんできた上端に焼台を二段ずえてくあり、煙道はその間をのぼりつめて、いよいよ地上へである部分は粘土で固めてあつた。

第一次調査の時に、宿舎として提供をうけた加木里小学校は新築工事中のために、今度の調査にあたっては宿舎として町長・鈴木元治とおしよめたのである。Aの窓でもそうであったが、とともにB窓では下部に痕が多く、燃焼室と想われる所からはじまつた焼跡のゆるい部分と、そこから危急度をなしのぼつてしまふ煙道におよぶ部分の二つにわけることができるが、遺物のはとんど限界までてきて、それら全体が焼成場としてつかわれていたようである。注意して観察してみたが、積糞のかわる附近に施設としてみとめるようなものは何もなかつた。

A区の測図がすんだので、一方でB区西壁の測図をとることも、

主力は西方の地区の間に残してあつた隔壁を、A区の方から切断してトレントをいた。機械面からA・B両方の窓の相互関係をみようとしたのである、遺物の包含層は大体三層にわかれており、最上部の遺物層よりは一本の角をもつ鬼瓦が出土した。

正午すぎ、遠く東二河の北政策部より夏目一平・岡田松二郎の両

氏が視察にこられる。

七月二十八日 晴

中央の隔壁を切り通して、A・B両区をつなぐトレーンの仕事を繼續した。

断面の最下部で、A・B両方の窓が約五十㌢の間隔をもつて床面がくほんでおり、二つの窓の区別が明らかとなつた。そこでB・C両窓の境界、A・B両窓の床幅をしるために、断面の下をさらに左右へ延長してA・B両区の地山にいたるまで掘りさげてみた。この調査により、東端のCの窓が未調査であるが、発掘の当初に二窓の窓が併列しているということを、假りに考えたのが妥当であつたことが裏付けられた。

しかもなお、中央隔壁の断面を注意深く観察すると、二度目・三度目の焼成を示す遺物包合層に問題を残しているのをした。A・B両窓の床がそれらの層序ではたがいに切り合つている点であり、これでは同時の焼成是不可能と考えざるを得ない。この問題についての解説は、この透跡の調査の焦点の一つでもあり、さらに附録を横に数個所切り通して断面を精密に観察する必要をみとめた。

予定した期日もきており、残つている中央隔壁には松の木が數本

下山するところにした。

第三次調査 (昭和三十年)

六月二十五日 晴

昨秋以来、第三次調査について何度も計画をもら、資源科学研究所の和島誠一氏には東京からわざわざ足を運んでいたいたりもしましたが、そのため時期にめぐれ、結局最終調査は春過ぎて六月になつしまつた。今度の仕事は二回の調査に残してある隔壁の取りこわしである。この作業を通じて窓と窓との相互関係の確認と、隔壁別採集による遺物の変化の検討という二点を課題として期待したものである。

土曜日の午後、学校を出発し現地に到着、とりあえず松の木を切

つてゐる間に久水・松崎・立松・新美・白井の各先生も集つてゐた
だいた。しつかりと根をはつた株をとりはずすことは仲々の辛苦な
仕事である。

窓と窓の相互關係によりよい空氣をもつたために、A・B両区をつ
ない横断トレーナーの上と下で、きらにそれぞれ一地点をえらび、
断面を観察することにした。すなわち上部の断面では前回の横断面
より二十段程けりおろし、下部では林道より約一メートルのぼつたとこ
ろで切り通した。

今日は例とか踏れてくれたが、梅雨の候であるので明口の天気を
急じながら下山する。

六月二十六日 晴

現地にはすでに田中・加藤の両先生も到着してて下さつて、仕
事は急ピッチにすみだした。

いずれの居位からも、瓦とともに山杯・山皿が併出しており、同
一時間に両方ともが焼かれたことを示しているが、各居位の間に過
物の変化はみられず、これらがなく短時間のうちに大量生産された
ものと考えられる理由である。

上部の断面を観察しながら、最上部の表土をはいでいくと、一
調査の時にA窓の煙出しを確認したときから、いわゆる煙出しのあ
り方に注目していたことでもあり、昨日も横断面のところどころに
黒い炭化物の多い簡便かはいつているのに留意していた点であつた
が、その簡便を追ついいくと細長い骨状になつており煙出しの通構
が姿をあらわしてゐた。わずか二米の幅にすぎない隔壁の間には益
の廻出しが確認できた。煙出しの構造はさきわめて多岐であり、粘上で固めあるもの、焼台の凹部を利用しているもの、山
杯・山皿の丸味を應用したもの、一基毎に同じものはなく変化によ
るだけである。

中央より下の部分からは、数多くの資料を得ることができたが、
従来一片も採集していない種類の唐草文軒平瓦をとりだした時は、
一同が歎声をあげた。今まで軒瓦で、極めてはゞでこなくて

何かわりきれない気がしてたが、これで不満も吹きとんだ。
夕やみせまるところ予定を完了し退跡とわかる。一年半の思いで
の道跡、社山をふりかえりながら山を下つた。

1 註

『社山古窯調査のあらまし』愛知県知多郡横須賀中学校
一九五四年

第三章 構造

一層序と数量

この遺跡の特色として、まずあげなければならないことは、窓が一基づつ独立した形で遺存しているのではなく、いくつもの窓が上下・左右にわずかずつずれながら、さらに窓の方向や傾斜にも変化をもつたまま、何處かに廻序をなしてかきなつていることである。

このことはやがて、一基づつの古窓をとりあげて、その実態をあきらかにすることを困難にするとともに、この古窓群の窓の数をも正確に把握することを不可能にしてしまう原因となつた。

遺跡の跡は、主として古窓の天井部がおちたと考えられる赤燒土層と、瓦類や山杯・皿を包含する灰分の多い遺物層が交互に堆積した形で構成されている。B区西壁の断面(第13図)より観察すれば、第一・第二・第三の各遺物包含層は、それぞれ上部に接する赤燒土層と組んで、一基ずつの窓をあらわしており、さらに、第四遺物包含層の天井部にあたるもののがみあらないが、表土の堆積する前に流失したものとも考えられ、いかえればこの断面からほんの窓の窓の存在と順序をうかがうことができる。上層・下層の各部にあらわれている不整合層は、遺跡のほぼ中央と仮定する隔壁横断トレーンの直上でついでに残してあるものはない点や、またこの断面がいずれの窓の窓の中心線をも意識して切ったものではなく、破壊されていた縁を中心として任意に切り通したものであり、ある窓ではほか中心縫がでているかと思えば、一方の窓では側壁近くが削めにあらわれていることによる。

しかし遺跡の中央隔壁を横断した東西のトレーンを北側壁までさげることにより、支丘の北側斜面をくまめている三つの床面を

確認し、この遺跡の最初の形は主軸を南北の線にたいし約一千度、南東・北西に傾いた方位にとつて二基の窓が焼出しう南へ伸びながら並列していたことがわかつた。とくに一・二次の調査の時に残しておいて、第三次の調査で精密にとりはづした中央隔壁の幅一六木の間に、八基の窓があつたことを、のこつていた煙道と焼出しがさずきかきねられていたことをしつたのである。

一 窓の構造

窓の大きさは横断トレーンを切った中央部で、東側のB窓が幅約一・八米あることをそしり、長さについては比較的純粋な形で、下部の焼き口近くより上は焼出しまでらべることができたAの窓(第13図)で約七米をかつてゐる。窓の傾斜については、A区の断面では地形との関係もあり、それに明らかにされではないが、中央の隔壁の東側にあらわれたB区西壁断面(第13図)にみられるように、大体二つの傾斜面にわかれてゐる。燃焼窓から焼成窓につづく約二十度のゆるい傾斜面をもつてゐる床面と、それにつづいて角度は三十八・五十度の急傾斜をなしてゐる部分で、これは第二焼成窓と考えられ、三上次男氏の復原された窓ハ少年院の窓(註1)のごとく、上の急傾斜の部分はそのまま広義の窓の役をもはなしてゐる。

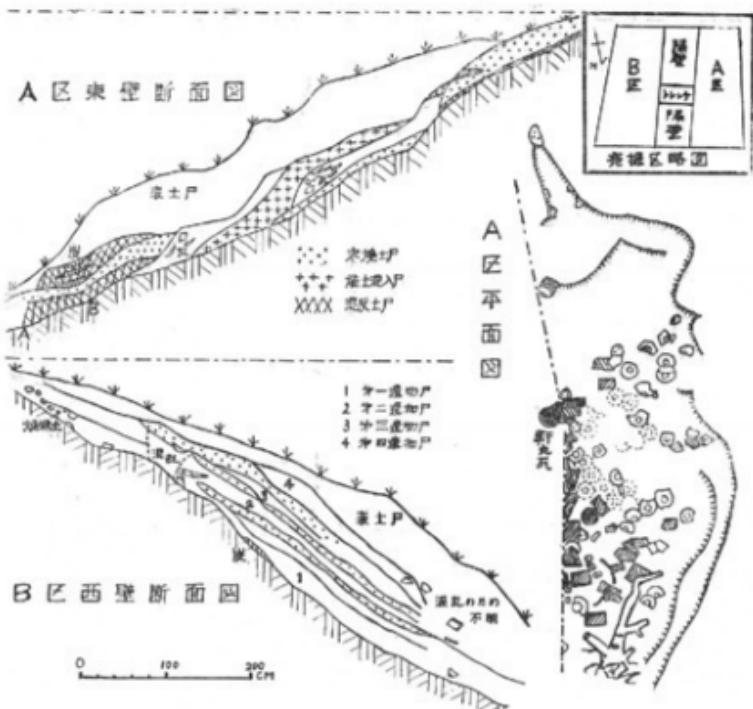
次にそれらの窓の各部についてのべてみよう。從来、窓の名義についていはるる名稱によばれていたが、ここでは三上次男氏が、窓口古窓についての報文(註2)の中で、統一されたものにしたがつておることにする。

焼き口・燃焼窓 林道の工事と雨水の流れによつて崩れきつておらず、ほんどの窓では燃焼室までは確認できたが、焼き口の部分は地点を想定するにとどまつた。A区断面図の最下端のA点附近(第13図)では窓の窓がかきなつて焼き口に近い燃焼室を示しており、またB区では林道の下を掘りさげてみると、焼き口につゞく灰積の

姿で瓦類・山抔・山皿の破片がたまつて出土してきた。燃焼室より焼成室へ移行する部分には、他の古窯に多くみられるような分岐支柱の存在はないに、わずかに断面が段をなして高くなっていることにより、窯室が区別されている。

焼成室 燃焼室よりついでいた焼成室は、この窯の主体となつている部分であり、内部の施設によりわけるものは何もない。床面の傾斜によくみられる変化により大きく二室にわけることができ、第一室の床面はもつとも広く、第二室になると傾斜が急に角度をますとともに、A区平面図(第13図)にみると、上端に近くなるとU字形がせばまりしづらされてきており、上段の附近は炭化物が多く堆積している。床面上には第一・第二焼成室とも馬爪形焼台がええてあり、比較的明確に示したままのものもあるが、その配列状態は他の山抔窯の例(註3)にみられるように、第一列・第二列と意識したとは考えられず、不規則な配列を示しており、窯の端の方などは床面を丸くえぐりこんで、焼台を使用せずに山抔の底を固定したものが多くみられる。

遺物のうち最も多くみられるのが、上方は第二焼成室のほとんど限界近くまでつかれており、鬼瓦・平瓦など瓦類は概して中央に配置され、焼成室の上下の端あるいは壁の近くには山抔・山皿をと、瓦を中心とした陶器のあとがうかがわれる。さらに尾辺部には焼き足りない遺物のあることから、火



第13図 社山古窯の構造 I (順序と平面図)

力が中央をはしつて窯の中を平均してまわらないなど、燃焼室より焼成室へ移行する部分に分離火栓がみとめられない点をはじめ、新しい窯として改良される以前の古式の窯がもつ弱点をあらわしている。なお天井部については、全部がおちて側壁とともに赤焼層の形でかきなりあつてるので、その様子についてくわしくのべることはできない。

煙道・煙出し 煙道の幅がせばまりながら急傾斜をなしてある第二焼成室の附近が、すでに広義の煙道の役目をはたしていることは二焼成室上部附近は真黒く炭化物がたまり、そして馬爪形焼台を西側にすえるのみという簡単な終末で、煙頭に移行している。煙道になると角度も減じ、約四十度で地上へみちびかれたり、その出口には粘土をはりつけて固めてある。その後、横断トレーナーから中央隔壁室をとりはずすことにより、七本の煙出しを検出することができたが、細部にわたつての構造は区々であり、無難作に自由な创意のあとがみられる。調査することをえた八本の煙道・煙出しの造構の特徴を略述してみよう。

イ 焼成室の終りに、馬爪形焼台を二個すえつけて、その間から煙りを誘導し、さらにもう一段、焼台で両側をかためてあり、最上部の地上へである所は、赤く焼けた粘土をはりつけている。ロ 横断面にあらわれている炭化物の量上に測る約五十組の黒土層が、その縦角が三十八度の傾斜角でのばつていており、馬爪形焼台から七十厘米で地表にまである。煙道の床には瓦をしており、煙出しは馬爪形焼台の滅山部を加工してかため、山杯と山杯をつかつて笠にしたものであり、岡坂第二にあげた写真とは、山杯を横にはすしたところである。(第14図)

ハ 煙道は焼台をおき、さらに二個の焼粘土をすえて地上へでており、ロの窯と同様に山杯が笠につかわれていたのか、横にころげていた。

ニ イの窯の西下部

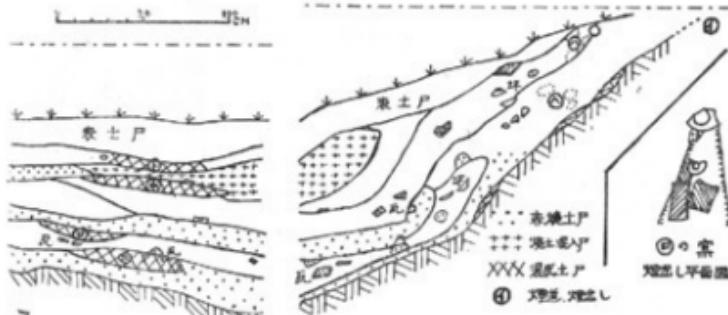
にかさなつて位置し、焼成室とは粘土塊で区切つておらず、炭化物の多い傾斜角三十度の煙道をはると二個の焼粘土を約十五個のへだたりで固定して煙出しとしている。

本 右側には焼粘土を、左側には二枚融着した山杯をすえて煙出しの形をとっている。

ヘ 煙道の支えとして山杯をつかい、煙出しの部分には馬爪形焼台二個が配設されている。

ト 煙道・煙出しの左半の造構がみとめられるのみであるが、煙道には山杯、煙出しの部分には赤く焼けた粘土があつた。

チ 炭化物の多い黒土層をおつていくと



第14図 社山古窯の構造Ⅱ(隔壁上部の横断面・西断面順序と煙出し造構)

薪木に赤く焼けた粘土がはりつけてあつた。

註

① ②

- 「上次男『古代木・中世初における窯』」地方の作窯技術
とその發達」(東京大学教養学部人文科学科紀要第五)
一九五五年
前掲古の小長曾窯ならびにうなぎ谷古窯(『うなぎ谷古
窯発掘の概略』愛知県知多郡阿久比町阿久比中学校一九
五四年)

第四章 遺物

この遺跡において調査することのできた遺物は、
この窯で製作された上器の瓦類と山杯・山皿、さら
に窯に附隨した各種の道具および灰にわけられるが、
ここではまず瓦類からしるしていく。

一 瓦類

1 種類と数量

私たちが調査できた範囲における種類・数量をさらに細分してみ
ると別表のごとくなる。表の内訳にも示したように私たちが調査
にあたつては、できる限り数量的に実態を把握していくことを期す、

調査資料数量表(瓦類)

種類	計	証					備考
		A 内 表 面 接 触	B 中 間 区	C 中 間 区	D 外 表 接 触	E 外 表 接 触	
丸瓦	53	完2	22	12	12	7	5
平瓦	225	完12	88	56	59	22	5
軒丸瓦 I	3	完2	0	2	0	1	2
〃	0	0	0	0	0	3	
〃	10	完9	0	6	2	2	1
〃	2	0	1	1	0	3	
〃	5	完1	0	2	2	1	4
軒平瓦 I	1	完1	0	0	0	1	4
〃	5	1	1	3	0	4	
〃	3	完2	0	0	2	1	2
〃	3	完1	1	0	0	2	8
〃	1	0	1	0	0	0	2
鬼瓦 I	3	0	3	0	0	0	4
〃	7	0	2	4	1	4	

丸瓦の累計は開先一をもつて、横とし、平瓦は外角四をもつ
て一個としてあつたものである。
計の中に元とあるは完形資料のことであり、備考の数は、当
方の発掘によらない資料である。

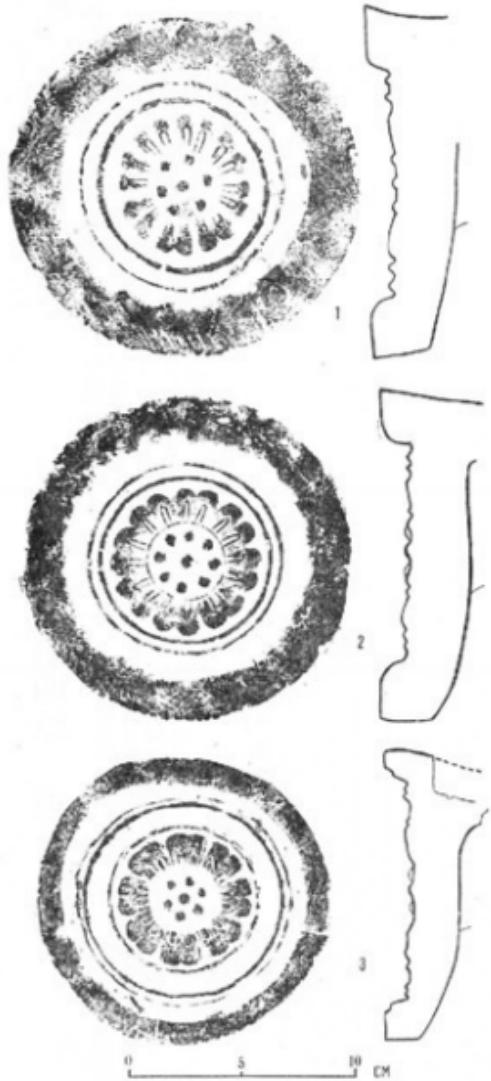
まづ表面に散っている遺物を探集し各種類の数をたしかめ、ついで第一次・第二次調査では出土地区別に累計し、さらに第三次調査では遺物を層位別に分類して採集した。しかし前節の遺跡の構造でのべたごとく、窯毎の区割が充分なしえなかつた点と、層位による大きな変化がみとめられなかつたことにより、地区別・層位別に数量を明らかにする必要がなくなつたので、全体を一括して種類別に表をつくつた。なお備考としてあげた數量は、山本善輔・小川二六・辯原路近の諸氏や、半田中学校・常滑古窯調査会より、社山古窯の出土遺物として提供をうけたものである。

2 形 狀

別表にあげた種類の順にしたがい形状を記述する。
丸 瓦 (図版第二) 男瓦ともいわれているもので、円筒を縦に割つた形であり、太さはセツトをなす軒丸瓦の大きさにより変化しているが、外径は十三と十五厘米にして長さはいずれも約三十三厘米である。表面は光沢をもつた灰白色で細状の胞文具をころがした網目がついており、裏面は粗面で細かい布目をもつてゐる。つなぎのため筒先は段をなして細くなり、その中央に徑一厘米の小穴をもつてゐるものが多いが、中には穴のないものもあり、私たちが調査した五十八個のうち八個は穴がなかつた。

平 瓦

(図版第三) 女瓦ともいわれる長方形にてわざかに反り



第15図 社山古窯出土・軒丸瓦 I
(2. 山本善輔氏蔵)

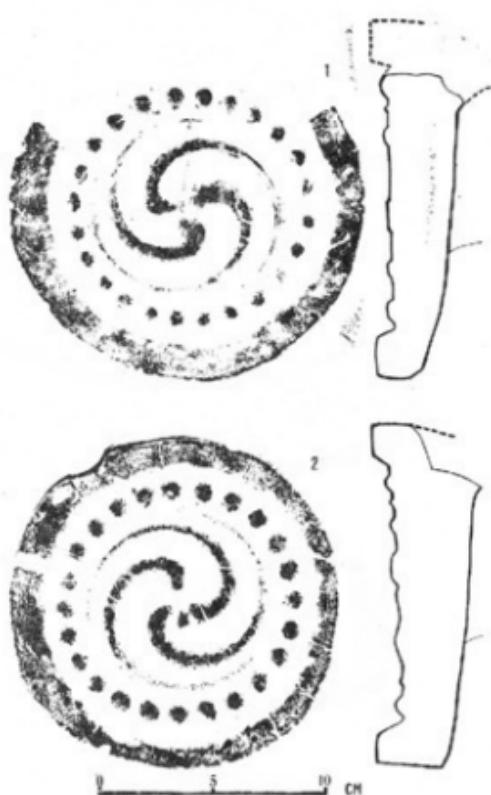
のあるものである。大きさや厚さは対をなす軒平瓦により変化しており、表裏とも粗質の面で文様はないが、とくに裏面は泥に密着するため筋目がある。

軒丸瓦

普通に鉢瓦・巴瓦ともいっているもので、丸い輪郭の中に文様をいたる瓦である。そして社山古窯の軒丸瓦は五種類にわけることができるが、いずれもつやのある灰白色の表面をもつている。

軒丸瓦第一類（図版第一の12・13、第15図の1）

大型の蓮花纹が二重あり、その中で蓮子の数が七顆あるもので、図版第一の13にあげた資料は欠けており同じく12の資料と重複しているが、とくに彫りが明瞭であるので見てみた。径は約十五厘米で瓣の数は八瓣の複瓣蓮花纹である。中房の部分は退化して肥厚も明らかでない。蓮花纹の周囲には二重の重團緑をもつていて緑はとくに高くて厚い。

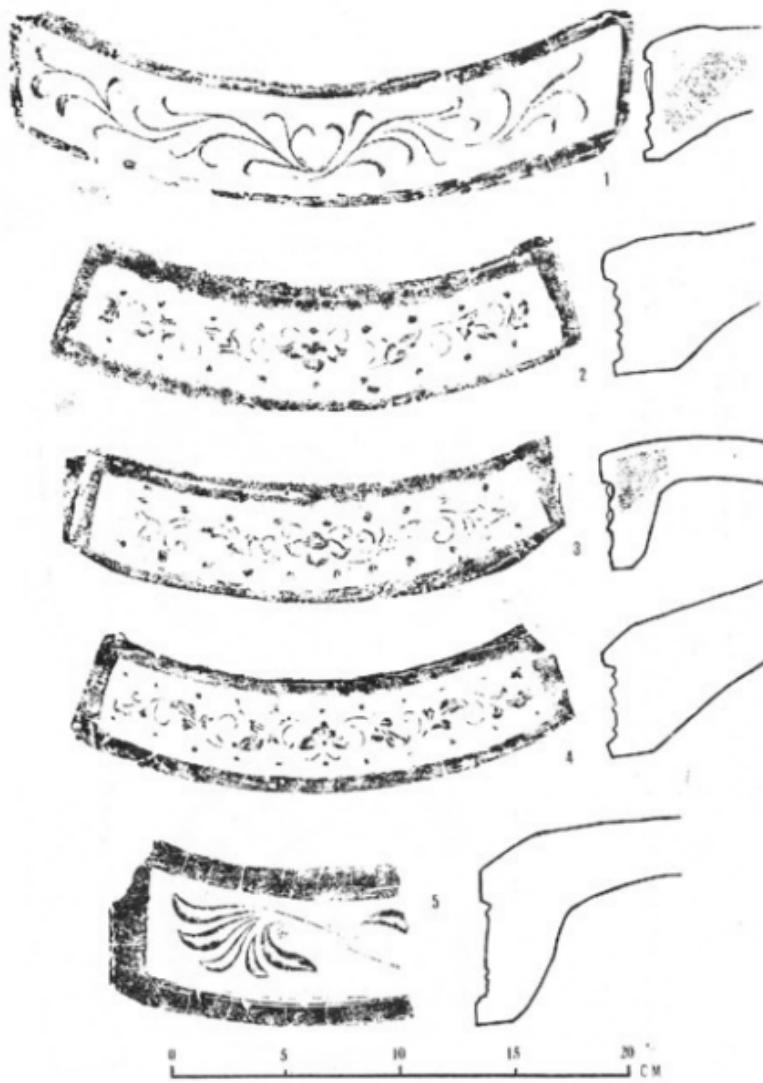


第16図 社山古窯出土・軒丸瓦 I

(1) 小川二六氏藏

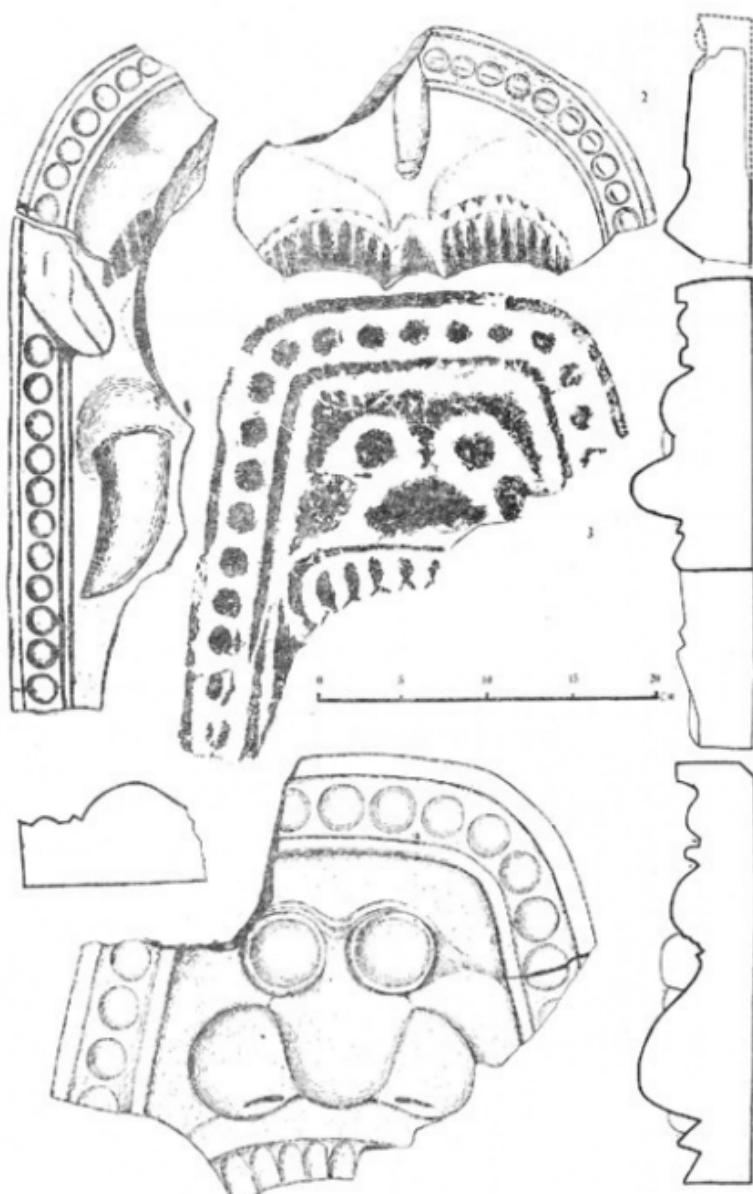
軒丸瓦第二類（図版第一の14・15、第15図の2）大型蓮花纹の外の一趣であり、大体の構造は第一類と類似している。しかし蓮子の数が九顆あること、中房のまるい凹が一線くつきとめられることが、さらにはもちろん八瓣の複瓣を意識したであろうが、蓮花纹の中にはきざまれていて胡桃が、前者が浮彫にされているがこの類は退化して浮彫（図版第一の15）にされているものが多い。私たちの調査した十一個の例のうち三個のみが浮彫（図版第一の16）にしてあつた。そのほか蓮花纹の外円をなしている重團が三重である点など部分的には相異している相所もある。

軒丸瓦第三類（図版第一の17、第16図の1）巴文に右巴と左巴と二種類あるうち、右廻りの方を圓類とした。径は約十五厘米、巴は三筋で頭部はとがり尾部は細長く、水の滴形を思わせるものである。縁に大陸な珠文をめぐらしており、珠文の数を完全に知る資料は少いが、調査した例はすべて二十四個である。



第17図 社山古窯出土・軒平瓦

(2、小川二六氏藏、5、半田中学校藏)



第18図 社山古窯出土・鬼瓦 (1~2 山木善輔氏蔵、4 小川二六氏蔵)

軒丸瓦第V類（図版第一の18・19、第16回の2）左廻りの凹文にして、第VI類とくらべてわずかに径が小さく、他はほとんど同じである。珠文の数はそろつておらず、完全な資料のうち一例は珠文二十四個（図版第一の19）であり、一例は二十六個（図版第一の18）である。

軒平瓦

一般に字瓦とか唐草瓦といわれているもので、軒丸瓦と軒丸瓦をつなぎてある弧状の構に細長い瓦である。そして社山占塗より出土する軒平瓦は文様と形態より五種類にわけることができる。軒平瓦第I類（図版第一の5・6、第17回の1）もつとも大型のもので、文様面における左右の幅は約二十七楕・上下は約六楕で無頭形である。中央より左右均等に唐草が承継を行しているようみえるが、細部について観察するとところどころに変化がある。均等をはずしており、縁はわざかに素線をめぐらしたのみである。個体により唐草の文様が少しづつかわつており、資料として当真にとりあげた二例のうち、軒快にさざまれてある拓影の例（図版第一の5）に比して、他の例（図版第一の6）は唐草の動きが純粋で稚拙な感があり、中央の左右の唐草がむすばれているなど不型の相異をみせている。

軒平瓦第II類（図版第一の7、第17回の2）いわゆる宝相花唐草文であり、中央の花形装飾を中心として唐草が左右均等に派生している。縁には上下に連珠文がめぐらされており、それぞれ九個である。左右の幅が約二十二楕・上下は約六楕で弱い平瓦がついている。

軒平瓦第III類（図版第一の8、第17回の3）第II類とはほとんど同様の文様であるが、上下の縁にもつてある連珠文の数が、上縁は九個・下縁は「一個で上下が対象しておらず、さらに軒の形が前者の刻頭形に比して全くがつた深頭が目立ち、しかも平瓦部になるといたつてうすくなつていて、左右の幅は約二十一楕・上下は約五楕である。

軒平瓦第IV類（図版第一の9・10、第17回の4）同じく宝相花唐

調査資料数量表（山坪・山咀）

種類	計	内			中間区
		A区	B区	C区	
山坪	659	231	172	181	75
山咀	32	12	8	4	8

草文ではあるが、第VI類・第VII類とはやゝ文様がことなり、中央装飾の花形が逆に使用されている点など変化の一つかである。連珠文は上下とも一側についたがいに對象しており、左右の幅は約二十・楕・ヒダは約五楕で、頭は倒卵形である。

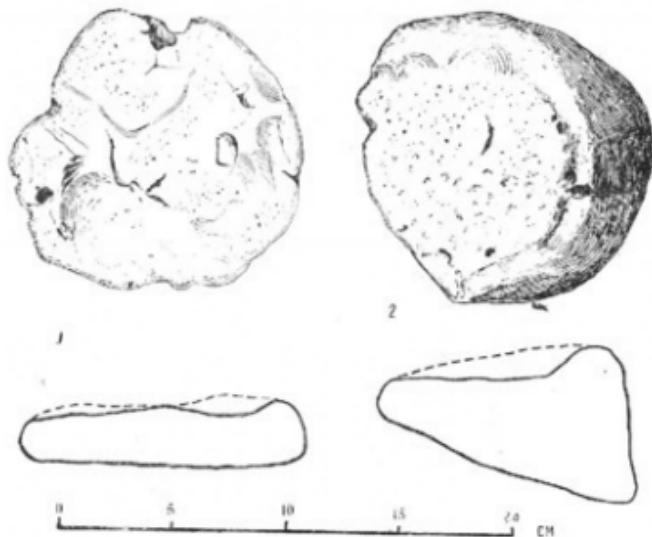
軒平瓦第V類（図版第一の11、第17回の5）杏葉唐草の瓦であり、二枚の杏葉が上下逆になつて相対している。文様面における左右の幅は約二十一楕・上下は約七楕の大きさであり、社山占塗でた五種類の軒平瓦の中で横幅にくらべ上下が口立つて厚い。頭はまた深頭形になつている。

鬼瓦 大棟・小棟の邊をとめたり、また屋根の裝飾の中心となつてゐる瓦である。前に述べた丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦などが、それぞれの型を使用していいる。

鬼瓦第I類（図版第一の1・2、第18回の1・2）一本の角を頭

にもち、口には左右に牙をもつてゐる。頭の頂上はかどらずに半円状をなしておらず、目から口にかけての変化を明らかにする充分の資料にめぐまれていないのは残念である。アーチ形をなした周縁には大粒な珠文をもつておらず、目の中には耳と考えられる形がみられる。大きさを推定すれば高さは約四寸・下底での横幅は約三寸一厘である。

鬼瓦第II類（図版第一の3・4、第18回の3・4）角や牙のない



第19図 杜山古窯出土・焼台

もので、この種類には比較的に完形または、それに近い資料が採集されているが頭はやゝかどばつておりアーチ形の周縁にある珠文はとくに大粒である。大きさは明らかに二種類にわかれしており、大きな部は第一類とセットをなすものと考えられ、大休同じよらな大きさをもつているが、小の部は高さ約二十七厘米・下底での幅も約二十七厘米となつていて。

二 山杯・山皿

1 種類と数量

こゝで山杯・山皿としてあげたのは、山杯・山茶碗・行基焼・小杯・山皿などと称されている須恵器系統に属する土器である。それらは一見して大小の二型式にわけられており、こゝではその二型式を通称にしたがつて、山杯・山皿としていくこととする。

この窯で調査できた資料の数は、山杯六百五十九個と山皿三十二個であり、それらを集計する時は底部一をもつて一個体としてかぞえたものである。採集にあたっては瓦類の所でしるしたごとく、表面採集と地区別・層位別に分類したのであるが、地区・層位による変化をみとめるることはできなかつた。

2 形狀

(第22図)の口径は約十六厘米のものがもつとも多く、深さ四厘米内外にして、底部は糸切であり径は約七厘米の附高台をもつている。高台の接地面にはそみ敷の跡がみとめられるのが普通であるが、その痕跡のないものもある。資料は莫大な量にのぼるが、形は一般によくとゝのえられている。軽のかつたようなものもあるが、もちろん自然軽である。

山皿(第22図)やよ大きいもの小さいものなど大きさが区々であり、口径が約九・六厘米で中皿とした方が適当のものもあるが、大体は口径八厘米強の程度のものが一般的である。底部は糸切であり、高台をもつものともないものと相なかばしている。高台のあるものはわざかに縫をなしてそりあがるものが多い。

二 黑道 具 そ の 他

瓦類や山杯・山皿などの土器を別にしたこの窯の出土品は、おびたゞい種の馬爪形焼台を中心とした遺道具であり、馬爪形焼台・円盤状焼台・その他にわけられる。

馬爪形焼台（第19図の2）窯の床面が傾斜しているので、熱処理する上部を窯入れする時、胴体が安定しないことから考案されたものである。すなわち上面が水平で底部に角度のある焼台であり、底部の角度は床面の傾斜角に合わせてつくられているため、その角度よりも平均傾斜を想像することができる。形状は区々であり、水平面の直径が小さいものは十種、大きいものは十二種のものまであり、焼台の上に山杯の高台や瓦片の積着したもののものもある。

円盤狀焼台（第19図の1）扁平な焼台であり、水平な床面に使用されたもので量は少ない。前者とともに長石の含有が多く、はせたようにわれているものがよくある。とくに馬爪形焼台に比して質がかたく指紋のついているものもある。

その他、窯道具として特別にとりあげるまでもないが、便出しをきづく時に使用した焼台・山杯・山皿などもこれであり、馬爪形焼台など器用につかわれているが、くわしくは構造のところで述べた。さらに瓦類をかきねて焼く時に、融着を防ぐために間にはめた平瓦片であり、平瓦を焼く時など多く使用してある。

さらに燃料としてつかわれた薪材が、炭として残つており、とくに質のやわらかい松材のものが多くみられる。

第五章 考察

一 構造論

本古窯は箕子山から西へのびた支丘基部の北側面の頂上に近く、南北に軸をおいて築造されたもので、中腹を削つて西方へ開かれた林道の崖面にその一部を露呈し、注視されることになつた。発掘に先立つて、林道面に現われた断面の所見から、三基の古窯が並列していることが推定されたのであつたが三基の中、西側の二基について行なわれた調査の結果は、意外にも一〇回以上にわたつて改築され、互いに重なりあつて、厚い順序をなしていることが明らかにせられたのである。しかも、当初築かれた二基の窯が、改築されるに及んで窯内に合流されたかに見え、必ずしも原位置に拘泥せず、互いに電り合つて築造されるという注意すべき状況がみられた。しかし、前章で詳しく述べられているように、本窯の構造が非常に脆弱なつくりで、焼成母に攻撃されて、全く窓壁を留めない状態である上、林道によつて窯口から燃焼室の一部が割りとられたために、構造の復元を非常に困難なものにしてゐる。

右のような状況であるが、調査された二基が竪窯の形式に属することは、窯裏からかなところでは、相似した構造を示し、燃成室と燃成室の主要な二つの部分からなつてゐる。いま東側のB窯についてみると、窓口の部分が破壊せられて不明ながら、全長約六米を有する窯底は、林道面から一米二十脚ばかりの部分が二五度の傾斜を示し、そこから僅かな段をなし、上へ約四十度の傾斜で上つてゐる。遺物は殆んど下の窓口の部分にたまつていて、こゝが燃成室でもあり、また燃焼室の一部であったと思われる。それより上の四十度の傾斜をもつ部分は約三米の長さを有し、中央で切つた切断面から、幅約一米八十厘米があつたことが知られる。この部分も橋脚ながら瓦・杯類が遺存し、焼成室として使用せられたことが推定される。この

窓に直接附屬した煙道・煙出しの部分は明確でない。

次に西側のA窓についてみると、B窓と略同様な構造を示して、長さも約六米あるが、二五度の傾斜斜を示す焼成窓の部分が非常に長くて、三米を測る。その下辺は約二十キロばかり落ちて改をなしており、それより下に遺物を認めないところから、燃焼室と、焼成室が低い段をなして区別せられたことが推測されるのである。

焼成窓の上端は、五十センチばかり平坦面をなし、それより、三十六度の急傾斜で上つていて煙道の部分に当るかと思われるが、こゝでもかなりの遺物が検出されていて、焼成窓として使用されたことがわかるのである。窓底は中央が浅く凹んで、ゆるやかな彎曲を示しているが、數度に亘る改築のため、どの程度の幅を有したか不明である。

また探査のべたように、A・B窓とも、高さおよび窓壁の構造は全く不明である。

また八つ以上検出された窓出しは、いずれも粘土の小塊を構えた簡単な構造のものながら、細部において若干の違いを示して、ある場合は、山形・山風を利用してするなど、その場限りの粗雑さをみている。

さて本窓は遺物の配列状態からみて瓦を中心としたものではあるが、山形・山風類も相当な数個に及んで、两者が同時に焼かれたことを示している。古窓の構造は前述のごとく不明瞭ながら、窓戸から、知多半島の丘陵一帯にかけて密に分布する山形窓（行基窓）と同巧のものであつたと思われる。すなわち、三上次男氏によつて復原された窓戸附近の行基窓のごとく（註1）、素朴單純な構造を示し、一相当に広く、かつ、さわめてゆるい傾斜の床をもつて窓が作られ、これにつづいて、四五度の急傾斜の床と低いアーチ形の扇形よりなる長大な第二窓が營まれる。第一窓は焼成窓兼焼成室、第二窓は焼成窓兼煙道と曰われる。第二窓はもつぱら鳴爪形窓台の助けるをかりて焼成された。内部には焼台を除いてなんらの施設もない構造のものであつたと思われる。

しかし、同様な山形・山風類を焼いた、附近に多く分布する古窓

がいづれも、かなり堅強な構造をもち、よく遺存しているのに対し、本窓が非常に脆弱なつくりで、一回毎に焼き直されていることはいかなる理由によるものであらうか。本窓が山形・山風類を併せて焼いたものではあるが、その配列状態や、數量からみて、瓦が中心であつて、山形・山風類はその属縁では附隨的に焼かれたにすぎないことが前章において明らかにされている。この点で、古く梅原末治博士が京都府北白河窯跡の構造について、瓦窓にあつては須恵器窓ほど熟練を必要としなかつたと推論しているように（註2）、瓦を中心とした本窓が、脆弱な構造を有する理由の一端をこゝにみることが出来よう。しかも附近人士の記述ごとく、この附近の精土が、比較的軟かく、高熱に対し弱い質のものであるところから、窓に上げ得なかつたことも、いま一つの理由になるであろう。しかし、同時代に、一方で堅強な窓が多量に構築されながら、等しく窓窓を職とした本窓工人たちが、このような脆弱な窓をもつて、生産に従事していたことはたんに瓦窓を中心とした性質のみでなく、本窓のじ人たちの性格に一つの示唆を投げかけるのである。

この点に關しては、さら後に詳説で述べられるであらうが、本窓が製造工場を中心として焼いていたことから、一般民衆を対象とした他の山形窓に対する、あるいは飯鍋寺に帰属するという特殊な位置にあって、庶民的な改革をいたわなかつたことにもよるものではあるまいかと推測されるのである。（植崎彰一）

（註1） 三上次男「窓戸古窓の調査報告」
（註2） 梅原末治「北白河町の窓跡」

（京都府史賛賛地調査会報第4冊）

二 古 瓦 に つ い て

知多半島に分布している数千基の古窓の中には、私たちが調査し



第20図 御林古窯出土の軒丸瓦（小川二六氏藏）および
かま山古窯出土のかめ文様



第21図 観福寺および論田古窯出土の杏葉唐草文瓦
1、観福寺出土（山田文治氏藏）2、論田古窯出土

られている（註1）。そしてこれらの瓦窯では宮崎市久米の御林古窯など平安末期と考えられる軒丸瓦（第20図）も出土（註2）しており、さらに平安末期から鎌倉初頭には瓦に類似した文様（第20図）が用花としてカメにもほどこされてきた（註3）。時期で云ふと、これが横須賀町大字加木屋論田の瓦窯は、社山古窯から谷をへてた南東七百米の地点にあるが、すでに昭和十八年に赤塚幹也氏によつて発見され、その後に坂重吉氏により紹介されている（註4）のをはじめ、数くない瓦窯としてひろくしられている。坂氏の報告によれば、赤塚氏の発見している資料は、私たちがこ

の報告書でいつている、社山の軒丸瓦第Ⅴ類と軒平瓦第Ⅴ類の二種類と文様を同じくする二個体であり、軒丸瓦の資料はかけてはいるが珠文の数は二十六個と推定できる。論田古窯よりは私たちもまた社山の軒平瓦第Ⅴ類の破片（第21図）を採集しており、社山古窯と論田古窯の間には、瓦のそれぞれの断面をはじめ多少の相異があるとはいへ、大体にして同種類の瓦を焼いたものと考えられる。しかし瓦以外の焼成物については、出中稔氏がその考察においての述べる山杯・白皿の変化のはに、フボの類の焼成もみられ、また丸瓦でも社山古窯のものがすべて筒先が改をなしで細くなっている（図版第二）のにたいし、論田古窯ではその種類のものもあるが、段をなきずに筒先まで次第に細くなっているものが多く、前者に比して後者の資料が圧倒的に多い点など二つの窯の間の変化をみていく。

社山・論田の両古窯で生産された瓦類は、それと同じ文様の瓦が西古窯から約一晩北方の台地端にある天台宗の藤原山觀福寺、あるいは名古屋の熱田神宮より発見されており、古代末・中世初めにわたる古窯と社山の関係をうかがうに足る資料を提供している。

鏡福寺の瓦（第21図）は、町吏編纂委員であつた故山田文治氏が、旧寺域より昭和十一年に採集したもので、私たちが社山の軒平瓦第Ⅴ類としてあげている香葉唐草文の瓦である。寺境の由緒について、奈良朝の開基をつたえているが、そろそろ寺伝は別としても、鎌倉時代の作風をもつて上様や、延喜元年の銘のある「鉢口」などの資料が現存しております。古代より中世にかけての本町隨一の古跡である。ささらに名古屋の熱田神宮との関係は、石田茂作博士の教示によるものであるが、同博士の資料によれば、社山の軒平瓦第Ⅴ類として分類した香葉唐草文の瓦が伊藤圭介氏の採集でしられ、また軒平瓦第Ⅴ類あるいは第Ⅵ類としてわけた宝相花唐草文の瓦が、奥田某氏によつて所蔵されているとのことです。当町附近は、観福寺から社山古窯址をふくめて、古代は木田庄といわれた地域であり、古來熱田神宮領を伝えている。資料としては文和二年（正平九・一三五

四年）に二十一町歩半が記録されているが（註5）さらに鎌倉時代中期までは、確実にさかのぼることができるといわれる猿投神社書にも、大釋迦とよもに木田郷二十町九反三畝が熱田神官領として記されている。しかし鎌倉時代初頭から古代における熱田神官関係の佐野資料についてはいまだ解明されない点が多く、古代末期から中世初頭を跨る社山古窯の時代の土連關係を明白にする充分な資料にめぐまれてない。

一方、こうした古瓦の編年上の問題については、論田古窯を発見した赤坂洋也氏が『常滑地方に就いての伝説を考える』（註6）との考察の中で、「私が加木屋論田の窯址から発掘したのに、巴文の巴瓦と唐草瓦がある。後者の文様様式から推測すると、此等の瓦は平安末期辺のものであり」といふ、また沢田山治氏は社山古窯出土の古瓦資料を示しながら「古常滑窑址調査」（註7）の中で「瓦類は二ヶ所で発見されている。室町期と考える」といつている。

今、私たちはこゝで出土した古瓦の個々の様式について、さらに年代を考えてみると、社山の軒丸瓦第Ⅰ類・第Ⅱ類・第Ⅲ類として分類した唐草文のものは、いずれも平安後期の様式であるが、それらのうち第Ⅲ類の資料を検討してみると、遺物の項でしるしたごく、舞瓣の中の胡桃が浮彫から変化して、縮彫となつているのが大部分である。また軒平瓦については、軒平瓦第Ⅰ類として分類した唐草文のもの、また軒平瓦の第Ⅱ類・第Ⅲ類・第Ⅳ類としてあげた宝相花唐草文の瓦はすべて平安後期の文様であり、この点、論田古窯出土ではあるが、社山の軒平瓦第Ⅴ類を平安末期とする赤坂氏の考察はうなづかれるものである。とくに軒平瓦第Ⅰ類のごとき唐草の左右均整な派生を意図しておりながら、部分的には均整をはずしている個所が多くみとめられるなど、平安後期の特色を明らかに示している。しかしながら他方では、軒丸瓦第Ⅲ類・第Ⅳ類としてあげた巴文のものや、軒平瓦第Ⅴ類の杏葉唐草文のごときものは鎌倉初期の様相を多分にもつており、同じように平安後期とは考えることができない。

こうしてみると、瓦をはじめとしてそれぞれの軒丸瓦・軒半瓦の文様等には、同じ古窯の出土でありながら、種々に多くの相異があり、また断面についていえば、その複雑さは前にした論田古窯の丸瓦をふくめて、さらに一層の変化がうかがわれる。しかしこれらの出土が、集落址のどとき性質の遺跡ではなくて、生産施設としての古窯であり、さらに幾層かに累積されている遺物資料の面にも、部分的には軒丸瓦類にあげた小形調花文の例のごとき、私たちの調査では十個にある元形資料をだしているのに、廻跡の上層を所々掘つていつた人々の發合は、ただ一個の資料をえているのみである。また軒丸瓦第1類の場合事情が全く逆であり、それらの人々に多くの資料が保管されているのに、それらの人々の発掘坑を中心として、床面まで掘り下ろめた私たちの調査では、一片の出土もなかつたことなど、局地毎の変化があるとはいへ、上層と下層の資料面には、とりあげていうような特別の変化もみとめられず、窓の使用が最初から最後まで短期間に焼成しわかつたものとして、調査の上からみるときは社山古窯出土の資料すべてを、同一年代と考るべきであり、この立場よりみて社山古窯の年代は鐵倉初頭とするのが妥当であろう。

同一の古窯より出土した古瓦の中における文様と断面の両者にわたる変化は、從來の寺院址などの調査にあたり、ときには集落址の研究の場合は、歴史時代の研究には廻跡上のきめ手がすくなく、軒瓦の端瓦の一端によつて年代の決定を余儀なくされたことの多かつたことを思いあわせて、こうした場合の研究における大きな困難さを指摘されるものであった。

さらに、この社山・論田祠古窯における古瓦をもととした廻跡上の研究は、同じくそれらの古窯で焼成されている山林・山祖の研究を軸として、やがて知多半島の古窯群それぞれの年代を決定していく基礎資料となしうるものである。（杉崎 政）

註

- ① 知多半島における瓦窯址については、社山古窯のほかにつぎの五例がしらべられている。
 - 1 横須賀町大字加木屋字論田、赤塚曾也氏の発見によるもので、社山古窯と同様の文様瓦を出土している。
 - 2 半田市乙川町東大高山、小川二六氏の発見によるもので、平瓦が出土している。資料は同氏所蔵。
 - 3 半田市若瀬新田深谷、小川二六氏の発見であり、平瓦出土、資料は同氏所蔵。
- ④ 常滑市久米字御林、小川二六氏の発見であり、軒丸瓦（第20匁）をはじめ丸瓦・平瓦が出土しており、資料は同氏所蔵。
- ⑤ 常滑市久米字にぎり池、山本善輔・柳原隆近の兩氏により発見され、兩氏はさらに近くの四畳半内においても古瓦の散在地を発見している。
- ⑥ 小川二六氏（半田市西勘内）所蔵、現在は常滑陶器館に出品されている。
- ⑦ 安村忠治氏（阿久比町卯坂・最勝寺）採集、知多郡阿久比町大字福住字高根、かま山古窯出土。
- ⑧ 坂重吉『須賀貢町古窯址より出土の古瓦文様見取図』（尾張の遺跡と遺物・名古屋郷土研究会刊行）一九四三年。
- ⑨ 橋本開延・張仲勝等の著述。
- ⑩ 『陶說』七号・日本陶磁雑誌会一九五三年。

社山古窯出土山杯数値表

口 径	底部径(当古都径)	高
15.0% (4.9~5.5) 5%	6.6% (2.1~2.9) 5%	4.5% (1.7~5.5) 5%
15.6% (5.1~5.5) 30%	7.5% (2.1~5.5) 75%	5.0% (1.6~5.5) 90%
16.0% (5.3~5.5) 55%	8.2% (2.1~7.5) 20%	5.5% (1.8~8.5) 5%
16.5% (5.4~5.5) 10%		

A は端は一般に丸味をもつていて、本古窯出土のものも少數ある。

山杯として知られている社山古窯も、遺物の数値においては山杯が最も多く、二回の調査で合計六五九個体が確認されている。この中から器形の明瞭なものをえらんで、口径と標高および底部徑(高台の徑)の各部の数値をもとめた結果は次のとくである。

これをみると各部とも、最大数値と最小数値との間に一極から一・五倍(三分五厘と七分五厘)の範囲があり、焼成時の便を加味するには、やや開きを感じられるようである。しかし比率がしめすように、本古窯で生産された山杯の共準法は、口径十六厘(五寸三分)、底部徑七・五厘(二寸五分)、高台五厘(一寸六分五厘)をしめすものを主とし、少數の異った基準寸法による製品も含まれているようである。なお山口については、口径八・四厘(二寸八分)、底部徑四厘(一寸三分五厘)前後、器高二・八厘(九分)の各数値をしめすものが最も多く、口径九・六厘(三寸一分五厘)を測るやう型の大きいもの(第22回12)がおよそ二つずつ、器高の底い(二厘)と六分五厘(第22回C2)が少數あつた。

山杯の器形における特徴は、口縁部および縁部から底部にかけての脚部のふくらみ、それに高台などにあらわれるが、本古窯出土の山杯については次の諸点があげられる。

山杯の形状は、口縁部および縁部から底部にかけての脚部のふくらみ、それに高台などにあらわれるが、本古窯出土の山杯は端は一般に丸味をもつていて、本古窯出土のものも少數ある。

瓦窯として知られている社山古窯も、遺物の数値においては山杯が最も多く、二回の調査で合計六五九個体が確認されている。この中から器形の明瞭なものをえらんで、口径と標高および底部徑(高台の徑)の各部の数値をもとめた結果は次のとくである。

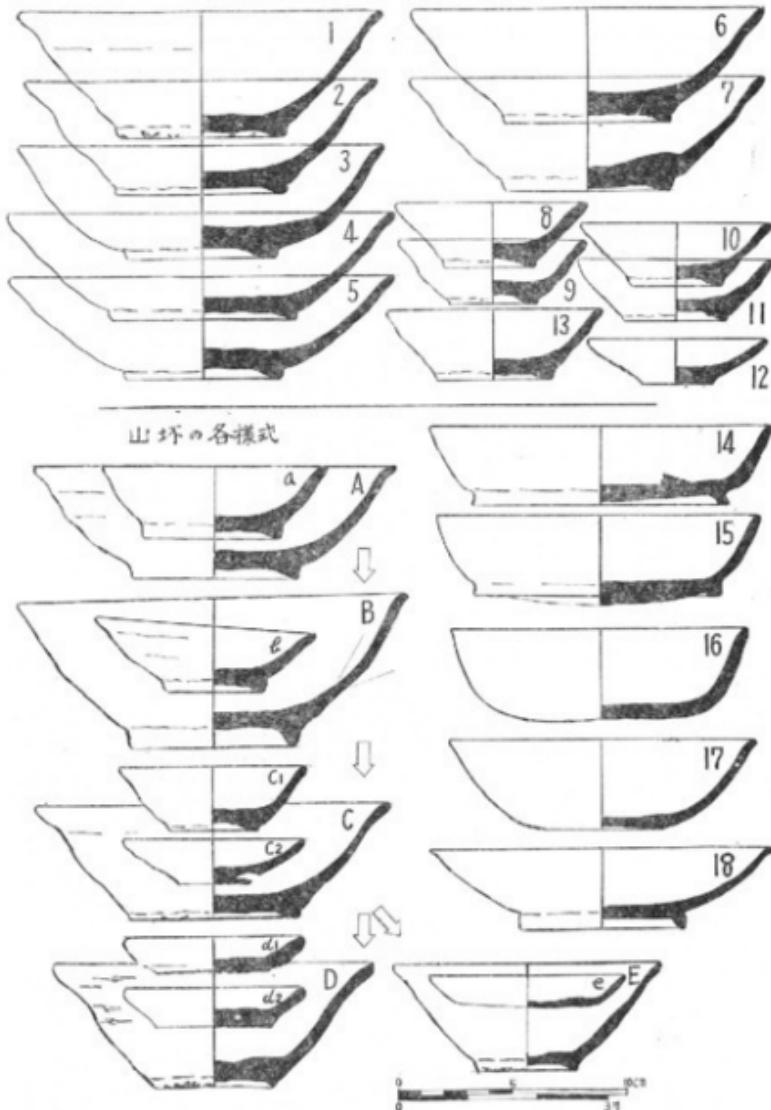
B 口縁部は外側より指先を押して仕上げ、やや外反するもの、口端が角ばる傾向のものは、外反する度合いの少ないものが多い。

C 脇部は、口縁部よりそのまま底部まで、ほぼ直線で筋張れるものと、底部近くにおいてややふくらみをもち、ゆるやかな曲線をえがいて底部にいたるものと、大きく二種類に分けられるが、前者もしくはその傾向のいるらしいものが多い。ともに仕上りは継ぎをのこし、指先でなされている。

D 外側とは逆に内面は、口縁部から底面にいたるまで、ゆるやかな曲面をなすものが多く、側面と底面との区別が明瞭で角ばるものはない。

なお山口については、上記の山杯における各部の特徴がそのままみられて、いわゆる相似形をなすものが多い。しかし、こゝで注意すべきは、少數ながら高台のつかないものが出土していることである。山頭の周年において、高台の有無が一つの指標としてあげられるととき、西暦の併出は本古窯の山頭について、その編年的位置をしめす点で重要である。

次に底部についてみると、山杯・山皿ともに角切り面にみられる良発状痕は、円弧の密に整然としたものと、まばらで切れ味の悪いものとの二種類がみられるが、後者のものが多くあつた。これは用いられた織機の用具の違いによるものとも考えられるが、胎土の中に荒い砂粒が多いものと少ないものとでは、同じ用具を用いても、實際の工芸には、切れ味にかなりの差が生じるのはいかと思われる。高台はすべてつけ高台で、断面は倒立三角形をなしている。これは山杯・山皿にみられる高台の一般的特徴で、奈良時代の壺類や瓶類に附される、角はつた断面をみせる高台(角型高台)や、古い時期の山杯・山皿にともなう上手物(註1)の壺類や瓶類の、角をなして、仕上げ丸味をおびた高台(丸型高台)と明らかに相違をみせる。仕上げおよび整形に、前二者が籠様の工具を用いた令人りな



第22図 上段の山杯・山皿（1～5, 8～18社山古窯出土、6～7岩屋口古墳出土）下段右の杯類（14と16曾池遺跡出土、15田原町南山第四号墳出土、17名古屋市熱田区元興寺址出土）下段左の山杯・山皿（Aとa 名古屋市南区曾池遺跡下層出土、Bとb 濑美郡田原町大アラコ古窯出土Cとc, c2 社山古窯出土、Dとd, d2 およびEとe名古屋市熱田神宮西遺跡出土）

つくりにたいし、山杯・山皿の場合は、指先を工具の代用とした簡易な仕事がなされていて、これが高台の形を規定したものと思われる。本古窯の例は、側面・角形をなす高台の形も不揃いで、高台の高さも、巾も均一なものはない。古式の山杯においては、この部分が美しく仕上げられ、底部に続く側面もならされて、つけた痕のめだたないものが多いのである。量的生産による技術の簡略化がおこなわれたものであろう。

C 粗裂痕高台に多くみられるのも山杯・山皿の一般的特徴としてあげることができるが、本古窯のものは思つたよりそれが少い。又痕の浅いのも特徴である。粗裂痕のかわりに砂粒の痕がつき、高台が押しひしやがれたようになつたもの、および、まれにほとんど粗裂痕がなく、変形も少い出来の良いものなどもある。本古窯の場合瓦を主とし、焼成においては窯の中火に瓦がおかれたため、杯類は配列上瓦の周囲におかれる結果となり、したがつてつみ重ねる数量も普通の窯よりも少なかつたのである。一般に粗裂について、A 山杯および山皿は、拾数枚づみ重ねて焼かれるのが普通である。これには、粗裂痕が用いられるが、この場合、下層におけるものは強く粗裂痕が残る。したがつて粗裂痕の少ない上等品は上層につまれるもので数量は少い。

B 最下層のものは馬蹄形焼成または、直接地山を西めて置かれるため、砂粒状の痕がつき、多くは上からの圧力で高台は変形する。

C 粗裂痕が高台部のみに見られて、杯部に残らないのは、杯部をつくり後一回乾燥させて、それから高台がつけられるところ時間のずれによるものと思われる。それにしても、一工程のちがいによって粗裂痕のつかないほどに杯部が乾燥するのであるから、あざやかに粗裂痕のつく粘土の状態から考へて、高台がつけられてから、つみ重ねをする時間は比較的短い間であつたことが推定できる。粗裂痕がとくにめだつてくる新しい様式の山杯などは、おそらく、高台をつけるとともにただ

ちにつみ重ね作業、そして窯入れと、手なれた一貫作業がおこなわれたのではあるまい。

なお底部にみられる特徴の一つとして、糸切り面にしるされる質子痕、および内部感面の中心には指先によるしやくり痕がつくことがあるが、本古窯の山杯・山皿にはこれが殆んどみとめられない。ただしやくり痕については、二・三の例がみられたが、それも強くはつきりしたものではない。

以上、本古窯の山杯・山皿の諸特徴がしめすものは、製品が量的生産を目的としてつくられたものであるという事である。このために手法の簡略化がめだち、仕上りが粗雑なのはまぬがれないが、そここには一定の作業工程と同定した手法にもとづいた、無駄のない手なれた生産方法がうかがわれる。つくられたものもすぐれた工人個人の要品といふより、幾人かの工人の集団が生み出した要品としてそこには個性的なものが少く、一定の基準寸法による規格品として標準されていたようである。これは本古窯の場合のみではなく、たとえば第22國において々1とA々々4・5とB々のごく様式、地域を超えた共通の口徑寸法がえられることがもうかがいう。当時のこうした工人の集団は、社山古窯を築いた人々のほかにもいくつかあつたようで、その一つの例として、同じ横須賀町内にある諭田古窯の場合をあげることができよう。

本古窯と加木窯の谷一つへだてた東方約一キロの地点にある諭田古窯は、本古窯の文庫瓦と同一記の古窯跡草文をもつ平瓦を出土して、本古窯との同時期の窯と思われるが、調査の始めは瓦の生産と結びついて、この古窯が社山古窯を築いた工人集団と同一の集団によつて築かれたものか否かが問題であった。しかし調査の結果論田古窯では窯の構造も違い、山杯・山皿のほかに瓶類なども焼かれていて両者の間には技術的にかなりの相違を感じられたのである。山杯についてみても次の表にしめされたような違いがあつた。

社山		論田		社山		論田		
1	15.0% (4.9±5.5)	15.0% (4.9±5.5)	底	1	6.6% (2.7±2.7)	7.5% (2.5±5.5)	社山	論田
2	15.6% (5.1±5.5)		部	2	7.5% (2.5±5.5)	7.5% (2.5±5.5)	社山	論田
3	16.0% (5.3±5.5)	16.0% (5.3±5.5)	径	3	8.2% (2.7±7.5)	8.2% (2.7±7.5)	社山	論田
4	16.5% (5.4±5.5)		5	4		8.5% (2.8±8.5)	社山	論田
		17.0% (5.6±6.0)		5		9.0% (3.7)	社山	論田
社山		論田		社山		論田		
1	4.5% (1.5±5.5)		内	1	内に記載のままであるもの が多い	内に記載のままであるもの が多い	社山	論田
2	5.0% (1.6±5.5)	5.0% (1.6±5.5)	内	2	内に記載のままであるもの が多い	内に記載のままであるもの が多い	社山	論田
3	5.5% (1.8±5.5)		外	3	内に記載のままであるもの が多い	内に記載のままであるもの が多い	社山	論田

これによれば、口徑においては、ほぼ同一の規格をもちらがら、底面部の大きいこと、および底面内面につく指によるしやくり痕がわずかながらもすべてのものにみられるることは、製作技術におけるくせの相違があることを物語るものであり、同一工人としては考えられないことである。すなわち社山・論田古窯を築いたそれを工入集団は、同じ寺院の瓦を分担して生産するという関係にありながら、生産技術の点においては差異があり、技術集団としてのそれぞれに一つのゆきがあつたようである。

こうしたいくつかの工人集団によつて、多量に生産された山杯や山皿は、その数量からみて相当広い範囲の分布廣が示えられる。生産地知多半島の中伊勢郡在郷においては、多くの場所で貝塚群とともに山杯類が散在する。昭和二十七年に横須賀中学校の手によって発掘調査された、橋ヶ崎塚跡上層の貝塚や(註2)高横須賀の大塚・大田の的場・郷中の浜堤上にみられる小貝塚群は山杯・山皿などをともなう中世貝塚なのである。

これは開ほした横穴式石室を神聖化した後世(山杯を焼いた時代)人々の祭祀用具として用いられたものと推定される。しかしこれは用途としては特殊な例で、普通一般には現在の茶碗と同じく飯や汁を盛る食器としてつかわれたものであろう。山皿については最近名古屋市内の熱田神宮西の小丘集落において、「爐に爐心を用いたあとのが数個発見されて、山皿が土として燈明器として用いられたものであることが明らかになつた。

最後に本古窯の山杯・山皿の年代を記すわけであるが、これについては、前段において杉崎堂氏が併出した丸の文様から、本古窯の年代を鎌倉時代初頭とされている。したがつて同じ窯で焼行して生産された山杯・山皿もこれに従つて鎌倉時代初頭のものと考えられるが、なおこれは山杯・山皿の編年の上からも裏付けることができる。

現在尾張地方にみられる山杯・山皿は、器形・胎土および焼成などからみて、次の五種式に分類できる。
A類、(第22図A・a) 胎土が緻密で焼しまりがよく、砂粒をほとんど含まない点に特徴がある。色は鼠色または暗褐色で一見須恵器にみられるような焼成をしめす。口杯に外反・内縮部も形で、口縁は丸味を帯びて口縁部にゆるやかに外反し、胸部もふくらみをもつていて、このため内面は美しい曲線を描いて底部にいたつているが、外側の器面は、仕上げるときの意識的にこされた継ぎ合二・三段のこきれている。底端は余切り底、二角型高台で粗放張が二・三みられるが、仕上りは他の様式のものに比較して良い。これにともなう山皿の形態は、器形および手法の特徴など、山杯にみられるものとはほとんどひとしく、相似形をなしている。口徑は十厘米前後。**A類**を出土する遺跡としては、名古屋市南区曾池遺跡下層(註5)があげられる。こゝでは、器面に指先さによるうず巻状の整形痕をのこし、広い底部に施仕上げによる角ばつた高台(角型高台)をつけている。

B 良朝様式の杯(註6) (第22回14) も網の下方に点在した。類、器形的には前記A類と次のC類との中間的なもので、口

よびB類にくらべてかなり広く、本社山古窯のほかに横須賀窯内にある冬至池古窯・鷺田古窯はじめ、知多郡の中北部および南部を中心として、愛知郡の東部にも分布が知られている。

(註9) 肺癌以外からの出症例としては、客

アーティスト

D 直頭端、無斑区は日本本邦を西端部の頭部となる。
（第22回D、d₁、d₂） 口輪端は頭部のAとC類のよう、九味
をねびす、逆に口輪端近くで厚さを減じて角はつている。脚部の
ふくらみが全くみられず、口輪端からそのまま底部まで直線で直線的
近い形で移行する。内面もこれに応じて底面も側面向も直線状を保
なし、その間に明瞭な角をもつものが多い。切り底に、鰓蓋
瘤のついた三角形高台がつけられている点は他の山蟹類と同様
であるが、高台は低く貧弱な上に加えて鰓蓋瘤もAとC類にくらべ
て極端に小さい。内部底面は指舟によれる所が最も多く、また
ことゝ、糸切りに向て質の子の痕がかなり明瞭にみられるもの
多い点は、D類の大きな特徴である。脚土は砂粒を多く含み、
これが背面に露出して脚土状を呈するものもある。口輪はやゝ
小型になり、十四脚前後のものが多くなるようである。山脈は

口経部における外反の度合い、および口端の丸味などA類の器形の上での特徴が薄くなつておらず、口経部から底部にかけて直線的に移行する傾向が強い。騎七は砂糖の混入があつたら、黒煙がさらさらしてな山畠らでない。色は一般に褐色かかつたものが多い。伴出する山畠は高台のつまものでは通常の山畠と相似形をなしているが（e1）高台のみられないものでは山畠が低くならない。次のD類の山畠への近似がめだつ（p2）。この二種類の山畠の伴存状態からC類は次の二種に分けられる。1、高台のつまもののみが伴存する場合、2、社山古窯にみられるごとくe1、e2、e3と同種がともにある場合、3、高台のつかないもののみ伴出する場合（知多郡大高町桜根西古窯（註7））。口徑は社山古窯の例であきらかなよう山畠は十六瓣のものが、又山畠は八瓣のものが多い。C類を出土する古窯の分布は、前記のA類お

多く、晉書通釋上巻、熱田神宮西遺跡のはか、名古屋市内の中世遺跡の多くはD類の山杯をともなつてている。なお熱田神宮西遺跡の一地点においては、C類とみられる山組を伴出した例があり、C・D二様式の關係を暗示する。

E類、(第22図E-e) 熱田神宮西遺跡や曾池遺跡に、D類とよもなつて出土するもので、焼成の一見して区別のつく特徴をもつている。全く砂粒を含まない胎土と、透子なつくり、および明るい褐色または乳白色を呈する硬質な焼成は、山形とは別製式のようないくつかの特徴があるが、D類に似た器形的な特徴と、切り戻しによる高台がつき、焼成痕のみられるなど山形の一般的特徴をもつている。内部底面と系切り面にはそれぞれしやくり痕、筒の子痕があり、高台のつかない山形もみられる点はD類に含まれるものとも思われるが、一見粗雑な感じのするD類と区別して別種に分類した。D種はD類より更に小さく十二種前後のものである。

以上の五種類のうち、正上秋葉によつて相互の関係の明らかなものをしめすと、

1、曾池遺跡における出土状態によつて、下部から出土するA類は上層より出土するDおよびE類に先行する。2、D類と、C類の山形は同一の堅穴から出土して、少なくとも兩種類の使用された時間が相接する時期のものか、並行するものであることが考えられる。

3、D類とE類は同一の堅穴から出土して併行關係にある。次に五種類の沿革および胎土・焼成などの特徴から、各種類の相互関係をみれば、

A類とB類およびC類の一部は、口絵部の反り、口端の丸味、網足のふくらみなどに相似点があり、浮出する山形に高台のみられる点でも一致する。特にA類とB類はこれが強く、器形の上でのA類からC類への変化の中にB類の段階を加えることは無理がない。

C類の一部には、器形的にD類的な傾向が強くみられるものがある。腹部のふくらみがなく口縁部から底部にかけて、直線状に移行する傾向や、山形の高台のつかないものがあらわれるのはこの例である。

3、すなわち山形の特徴はC類を中心において、器形の上からは、ふくらみをもつた肩部が直線状に、口端は丸味がなくなつて角ばる傾向へ、そして高台は、整つた美しいものから、粗雑で食器なものへの方向がみられる。山形にはこれが一體はつきりあらわれていて、高台のつかないものから、それが略されたものへ、そして更に單なるもののへと変遷がたどられる。

以上にあげた山上秋葉からみた相互關係と様式的特徴から、五種類の山形・山形の相対年代は、次のように編年される。(第22図参照)

$$A \text{類} \rightarrow B \text{類} : C \text{類} + D \text{類} \rightarrow E \text{類}$$

しかしC類とD類はなお二、三の種類に分けられるようであり、その中で兩類の併行する時期もある事が熱田神宮西遺跡におけるD類とC類の山形が併存した例から考えられる。

四時期に編年された山形および山形の時期の年代は、同じ層から六段階様式の杯と上して出土したA類が最も古く少なくとも平安朝中期をくだらぬ時代のものである事は考えられる。B類は大アラゴ占星の伴存した在銘窯から平安朝の後期におこなわれたものであり、A類に統く時期のものとして編年と一致する。C類についてはこゝであらためてくりかえさずもなく、本社山古窯について鎌倉時代の初期のものと考案されており、平安時代の後期と推定されたB類に統く時間のものとする山形・山形の編年の時期と一致する。しかし社山古窯の山形・山形はC類のうちでも、山形に高台のつく例が多くあり古い時期のものと思われるから、実際のC類の時期は鎌倉時代全期を通じておこなわれたものであろう。最後にD類およびE類の時期は、C類と併行する時期も考えて、鎌倉時代から次の時代にいたる時期にもおよぶものと考えられる。(山中 稔)

① 註

① 久永春男『遺物遺跡の取り扱い方』(『日本歴史講座』第八卷「歴史教育篇」)に、須恵器系統の陶質土器は都と地方、富めるものと食しきものとの間に差異が生じた如くであると記さ

れているが、粗陋な量的産物である山杯・山皿類に対し陶土が磨滅され、仕上りも美しく、杯・碗類には多く蓋のついた陶質土器類がある。(第22図18)これを便宜上、上手(じょうてもの)物と総称している。

杉崎章『棚ヶ坪貝塚』(一九五三年、横須賀中学校)

杉崎章氏の教示による。なお本報告においても同氏が第一部三『古窯』において記述されている点である。

名古屋市南区呼続町戸部曾池遺跡。野球場建設とともによう土取作業のさいに附近の新郷中学校三年早川義君によつて発見されたもので台地にはめずらしい小規模な泥炭遺跡である。上下の二層に分れ、厚い有機土層である下層からは奈良朝様式をもつ环頬や古式の山杯・山皿とともに、下駄、とおなどの木製品が発見されている。

この様式の杯を焼いた古窯としては谷沢靖氏の測定された、碧海郡高岡村字中田東唐池古窯がある、同氏『東唐池古窯の遺物について』(野帖第2号、一九五六年)。

(野帖第2号、一九五六年)

第五章第四節(久永春男氏執筆の「社山古窯の歴史的背景」)

石川輝行『猪田谷の古窯群』(野帖第2号、一九五六年)

杉崎章氏の教示による。

瓦をすゑつくり窯で山杯・山皿類とともに焼くことは、自然釉の吹出した陶質化した瓦が数の中はどうしても混つてきあがるのをまぬがれえなかつた。製品のできばえに偶然性が多分にあること、品質がそろわないとすれば、技術としての未熟度であり、不経済でもある。しかし尾張でも三河でも平安朝のころの寺院建築は量質ともにまずしく、その造瓦の発見例は奈良朝ごうのそれにくらべてむしろ少ないくらいで、専業としての瓦製造は平安朝の末葉にはこの地方には存しなかつたのであろう。

鎌倉幕府成立の前後から寺院建築は尾張三河でも各地でおこなわれ、知多半島ではすゑつくりの技術と施設が瓦の製造に転用せられた。奈良の東大寺再建のための瓦が渥美平島の伊良湖岬で焼かれたのも(註2)社山古窯とさほど年代の隔たりのない頃のことであった。

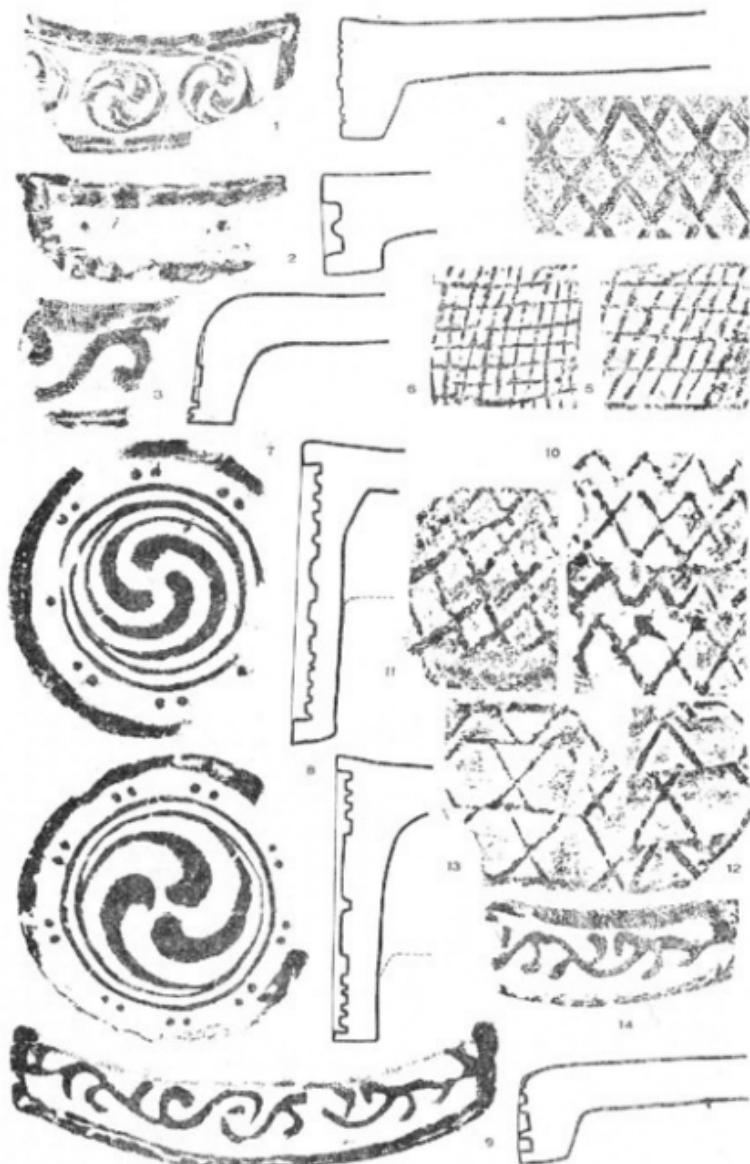
そして三河の碧海郡知立町知立神宮寺址出土瓦、南設楽郡新城市大字竹原・広金寺址出土瓦、同町大字上平井・極樂寺址出土瓦(第23・24図)などに見られるように、平瓦における押型文および軒平瓦の文様の上に残す仕上げ方など、瓦の製作手法における地域色も見受けられる。

そして三河の碧海郡知立町知立神宮寺址出土瓦、南設楽郡新城市大字竹原・広金寺址出土瓦、同町大字上平井・極樂寺址出土瓦(第23・24図)などに見られるように、平瓦における押型文および軒平瓦の文様の上に残す仕上げ方など、瓦の製作手法における地域色も見受けられる。

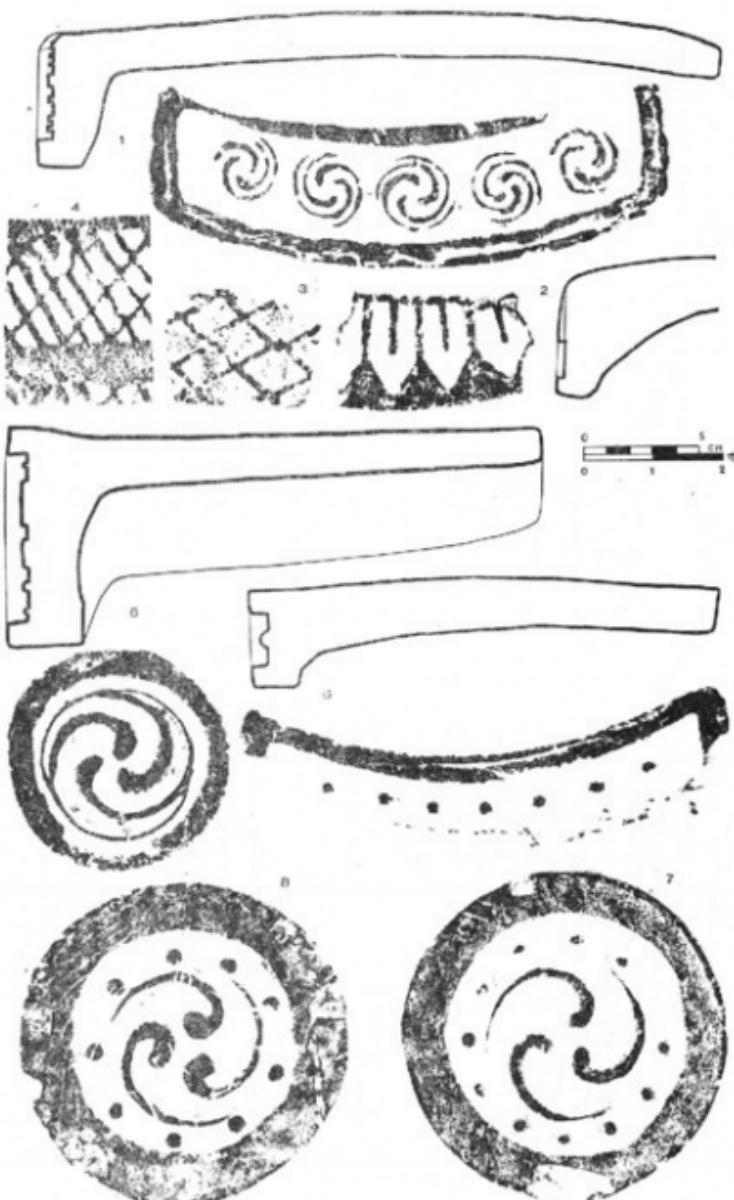
(第24図)にはすでにいぶし手法が見られ、また吉田城址出土瓦(第24図)が語る(註3)ように瓦葺建築が宮廷と寺院のわくをこれて地方の武士・城主廟の居館にも用いられるまでになつた。吉田城戸によつて山杯・山皿がすでに止揚せられたこの当時には、おそらく瓦の製造もその需要の増大とあいまつて独立した生産がおこなわれはじめたことであろう。

四 社山古窯の歴史的背景

社山古窯は山杯および山皿と瓦とを同時に焼いている。諭田古窯もまた同一の窯で瓦を焼き、山杯・山皿などの陶質土器を焼いている。知多半島には現在、社山古窯と前後する年代の製作と推定せら



第23図 1～6 猿海郡知立町知立神宮寺址出土 軒平瓦および平瓦(知立神社蔵)
 (縮尺5倍) 7～14 南波美郡新城市大字竹広・・・・・全寺址出土 軒丸瓦軒平瓦および平瓦
 (夏目邦次郎氏蔵)



第24図 1~4 長野県新城市大字上平井・極楽寺址出土軒平瓦および平瓦(東郷中学校蔵)
 5~6 長野県新城市大字大宮・石座神社境内出土軒丸瓦および軒平瓦(夏目邦次郎氏蔵)
 7 名古屋市熱田区熱田神宮寺址出土軒丸瓦(田中稔氏蔵) 8 豊橋市吉田城内出土軒丸瓦
 (豊橋市公民館総合資料室保管)

社山古窯は私たちの発掘区域のみにおいても十数回の重複のあとが見られたが、出土瓦の中にも、軒丸瓦に蓮花文と巴文、軒半瓦に宝相花唐草文と杏葉唐草文と、文様系統の異なる二種類があつて、必ずしも同一寺院のための製作ではなく、むしろ別々の寺院の注文によつて製作せられたものととくである。

杏葉唐草文軒半瓦は社山古窯の北一・二軒にある天台宗の寺院跡尾山御守の境内から発見せられていて、この注文によつて製作せられたものと推定せられるのであるが、まったく同一様式の杏葉唐草文軒半瓦が社山古窯の東南一軒にある諏田古窯からもまた出土している。ところが諏田古窯はその窯の構造においても、作出する山杯の様式においても社山古窯とはやゝ差異が見られ、両者は別個の工人集団によつて作成されていたことが推定せられる。

同一の窯で別々の寺院の注文に相応いで、同じく窓の異なる山杯を製作し、また工人の異なる別窯の窓で同・寺院の注文に相並んで応じて同一規格の同・文様の瓦を製作したということとは、これらの窯がそれぞれ独立した経営であり、白杯・山皿の製造を本業としつゝ、注文があれば瓦をも焼いたところの小手工業者であつたことを物語るものではなかろうか。

そして社山古窯と諏田古窯とがひと丘の距離に、互に独立した経営として窓を競ひ合つたとする、知多半島のいたるところに數千窯におよぶ窯が築かれている中には、社山や諏田と並んで同年代に、なお多くの窯がそれぞれ独立した製陶工人によつて經營せられてゐたであろうことが考えられる。

それらの製陶工人が相互に何らかの組織を、たとえば同業組合のようなものを結成していたか否かについては、残念ながら文献は記すところがない。しかしこゝに、時代を同じうする山杯・山皿は、それぞれの工人集団の手法の差をとえ、地域差をとえて、一定の規格にしたがつた製品であったという事実がある。

社山古窯出土の山杯は口徑九寸一分（一六釐）高さ一寸七分ないし八分（五七五・五釐）が標準型で、高台はたけが低く内側がなで

つけられた斜面をなしているのが特徴であるが（第22図1-25）。三河の南設楽郡新城町大字竹弘・広全寺址から羅倉様式の瓦に伴出した山杯（第25図3-8）も口径五寸三分、高さ一寸八分、高台の低いことも社山のそれにひとしく、ただ広全寺址の山杯は器底が詰じて厚ばつたく作成されている点が、社山の山杯の口辺部を勘く仕上げであるとの異なる。豊橋市大村町大畠貝塚出土の山杯（第25図9）も口径五寸三分で同規格、高さは一寸五分五厘でやゝ低いが、器壁の厚ばつたく作りは広全寺址のそれに近い。口径五寸三分で高台の低い山杯は遠江の郡出川の流域においても発見せられ、（註4）すくなくともそれが遠江・二河・遠江をつなぐての鍛合げであるとの異なる。

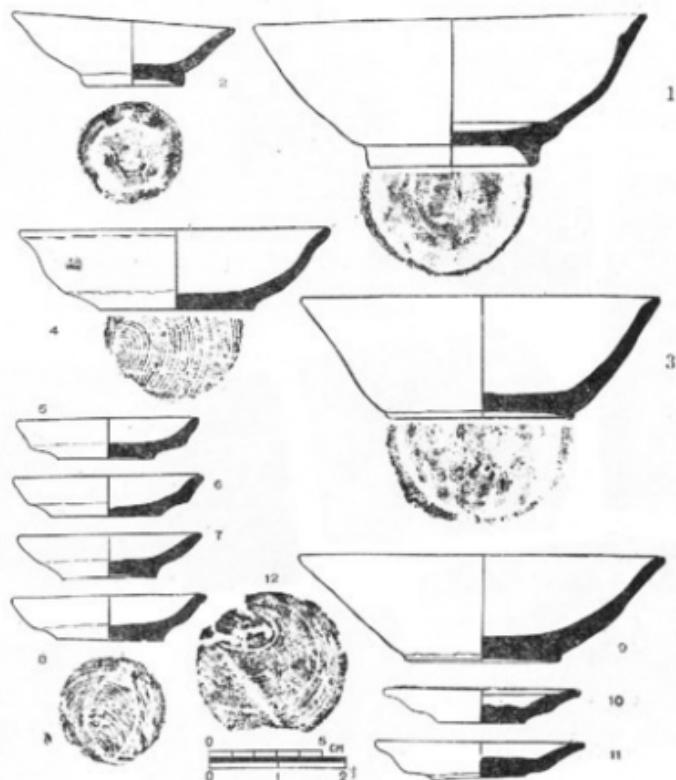
また広全寺址からは土師器に類した赤色の焼成で糸切式の小皿が多數出土している。「口径二寸六分五厘」と「二寸八分五厘（八ヶ八・六ヶ）高さ六分（一・八吋）」の外腹が中ほどでふくらんで段をなすのが特徴（第25図5-8）であるが、それと同一様式で口径一寸八分五厘（二寸、高さ五分・六分、同・規格と見なしうる陶質の小皿（山皿）が諏田郡田原町吉胡日塚の表土層から出土している。（註5）（第25図10-11）広全寺址からはほかにやはり赤色焼成の糸切底の山杯（第25図4）が出土しており、それは碧海郡知立町知立神宮寺址からも鍌合様式の真とより採集せられていて（第25図12）。この上御器皿の赤色焼成の山杯と皿は、ある期間山杯・山皿と並んで製造せられたものらしい。ところで社山古窯出土の山皿（第22図）も口径は二寸六分五厘と二寸七分五厘の同・規格であり、高台を附けないものには高さもおなじく六分のものもある。しかし広全寺址および諏田貝塚出土のものは底部が近く圓形であるのに対して、社山出土のものは底部が狭く舟形に近く、ことに高台を附したもののは内り法も深く作られ高さ九分（二・七吋）、小杯とも呼びうる形態である。

「正五位下行兵部大納言三河守藤原朝臣頼長」の銘がある並（第26図）が出土して、実年代が十二世紀中葉であることが知られる（註6）諏美郡田原町人字唐字人アラコ古窯址においても蓋、鉢、胸塔な

どともにやはり山杯・山皿が焼かれている。社山古窯のそれにくらべると山杯・山皿（第25図1と2）ともに口径が大きく、規格が同一でない。山杯は縦じて器壁がうすく作られ、たけの高い高台を附け、高台の内側はきれいになでつけられて斜面をなす。口径五寸九分（一七・四厘米）、高横須賀石屋口古墳の石室内から発見せられた山杯の口径がこれにひとしいのは、やはり同一規格にしたがつて製作せられたものであろうか。山皿は小杯形に造られやゝ粗雑な高台がその全部に附けられている。口径三寸二分（九・七厘米）、名古屋市南区呼続町曾池遺跡出土の山皿（第22図）と規格がひとしい。

大アラコ古窯址、社山古窯址、広守塚、大政黒貝塚、吉胡貝塚と、その出土した山杯・山皿を並べて見ると、社山のそれは規格の上では後の三者と一致するが、様式においては前者に近く、ほぼ兩者の中間に位置する。これは年代的変遷と見なししうる。

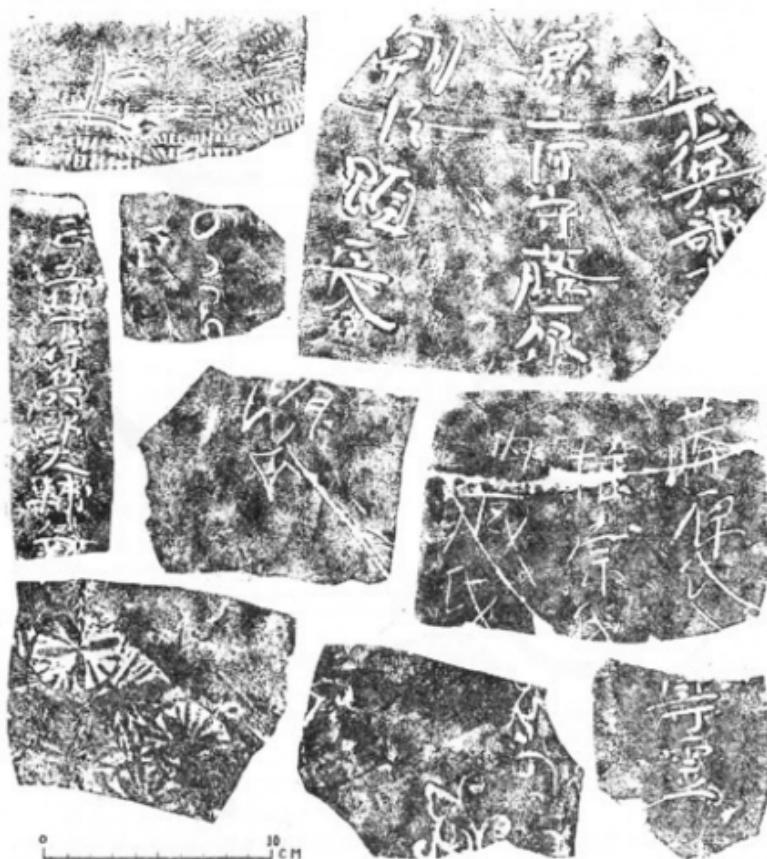
山杯における高台の粗雑化となるんで、山皿における高台を附した杯形から高台なしの皿形への移行は、おそらくは大量生産の必要



第25図 1～2 混美郡田原町大字芦字大アラコ古窯址出土の陶質土器 3～8 南設楽郡新城町大字竹弘・広守寺址出土（3は陶質土器4～8は赤色焼成の土器）、9豊橋市大村町大蚊里貝塚上層出土の陶質土器、10～11混美郡田原町吉胡貝塚上層出土の陶質土器 12碧海郡知立町知立神宮寺址出土の赤色焼成の郊の条切式

と単価の安値さにもよらず、いしたものであろう。そして他方に、いわば上手物とでもいふべき製品が同時に製作されているのは注意せられる。大量生産が品質の低下をともしておこなわれ、その価値の低減とともに、上手物と下手物への分裂がその量産に並行しておこなわれたのである。

同時代の山杯・山皿が、一定の規格を有する製品であること、それが知多半島と陸美半島、尾張と三河の製品における様式の地域差を超えて、定の規格に統一せられていることは、商品流通を媒介として、製陶工窯が互いに直接に同業組織を有しなかつたと仮定してもなお間接には組織化されながらうか。たとえば、尾張美濃田原町大字芦宇向山第四号墳の横穴式石室内から発見された高台



第26図 愛知県瀬美郡田原町大字芦宇大アラコ古窯出土・壺跡および鏡き型文様

を附した杯（第22図15）は、口徑四寸七分（一四・二厘米）、附近の大字西山崎・芦北遺跡出土の杯と口徑がひとしいばかりでなく、浦江難をこえて磐田市二之宮・大池出土の杯（註7）とも口徑がひとしい。また名古屋市南区呼続町菅原遺跡下層出土の高台を附した杯（第22図14）は口径五寸（一五・二厘米）、河の碧海郡高岡村大字中田・東廢池古墳出土の杯（註8）と様式も口径もひとしい。これは偶然の一一致ではないであろう。延喜式の民部下・年料難器の項に原文載る張國のととのえるべき瓷器の種類ならびに数量とともにその径が一々記されているが（註9）それは延喜式とならんで瓷器をおさめたため長門国に命じた規格とまったく同一である。表良朝から平左衛門初期間にかけては確実に自身がこうした瓷器製品の規格にも関与する

ところが秀吉が死んでから、徳川家康が天下を掌握する。しかし、安土桃山時代から鎌倉時代にかけて、律合制国家機構が崩壊

してゆくにつれて、喫茶製品の規格にはだいに商品利益それ自身が直接に反映するところが多くなつて来たことである。そこでこの地方では山岳地帯の村落々によれなく山一杯・山側の分布が現れる。これは、もとより山間部の地理的条件によって生じたものである。

見られ（註10）中世農村の日常生活は全くひとのでござたし
商品山林・山脈は広く流通したのであつた。（久水春男）

許一、第五章第二節 許2、譚美那史 一九二三年（大生十二年）

3. 火地古斯
西元一七八九年
蘇格蘭人所繪
五十二年
(昭和二十八年) 訂正
月圖華三氏所藏

註5、『古品真藏』六六頁。文化財保護委員會 一九五二年（昭和二十七年）

註6、圖目作成「文字入りのかめ」三河郷土学会報第二号、一九五二年

明治十六年(1883)正月

蘇定國が初めて一詞で記載されるのは後醍醐天皇一二二年十二月で、久安元年（一一四五）十二月源氏守に転じ、久

安五年四月ふたゝび二司守となり、久寿二年（一五五年）にやめるまで前に八年間あとに六年間、合せて十四年間であった。この文字入りの絵は同時にいくつも製作せられたもようで、

あとがき

木戸ができあがるまでは、昭和二十七年六月の柳ヶ坪遺跡の調査以来、幾多の人々の指導と援助にめぐまれてきた。すなわち柳ヶ坪遺跡のときには、日本考古学会員の池上半・久永春男の西氏はじめ、異友加藤岩蔵・田中稔・芳賀陽の各氏の積極的な協力をうけた。さらに岩屋口古墳の調査・高御前遺跡の試掘の際にはまた名古屋大学考古学教室鈴木一氏および紅村弘・田中稔西氏の援助によつた。古墳の分布調査にあたつては加木屋の治山治水事業の責任者であった早川清一氏の案内によつた。とりわけこゝにその詳細を報告した社山古窯の調査には、昭和二十九年の三月から昭和三十一年六月の第三次調査にいたるまで、直接に学術上の責任者として御指導をいただいた日本考古学会員久永春男・名古屋大学講師鶴見の兩氏、さらに二次にわたる調査にも勤務をさして参加していただいた田中稔氏の援助にたいし必ず謝意を表したい。あるいは刈谷東中学校の加藤岩蔵・半田中学校立堀安・阿久比中学校斎美敏弘・龜崎中守・白井義・城山中学校木夫の各教師、さらに地元では地主の早川正三氏、造園に隣接した早川幸一氏、当時の加木屋区長であつた伊藤理恵氏、とくに宿舎の提供をうけた加木屋小学校と前町長高澤元治氏をはじめ、町民各位のあたかいい援助にたいして厚く感謝いたしたい。また秋爾の中を実地踏査をわざらわし、遺跡の立地について御指導をいただいた名古屋大学地理学教室の井原弘人郎氏、調査後の資料整理について懇切な教示をうけた東京博物館の石田茂作博士・名古屋大学考古学教室の池田正一氏・愛知県教育委員会の平山久氏、その他に本報告書の作成にあたり、心よくその面倒される資料を提供していただいた半田市の山木善輔・小川二六・柳原隆近の各

氏と半田中学校・常滑古窯調査会の好意に深く感謝する次第である。

最後に特筆しておきたいことは、これらの調査におけるほとんどすべての作業が、横須賀中学校郷土クラブの生徒諸君によつてなしとげられたことである。横須賀中学校郷土クラブの活動については、かつて「考古学と郷土教育」(日本考古学講座)所収「九五五年河出書房刊」の大體例として報告したこともあるが、高御前遺跡も柳ヶ坪遺跡も横中郷土クラブの発見であり、岩屋口古墳・社山古窯の調査と、横須賀の地域を原始時代より古代・中世にいたるまで系統的にとりあつかつていくことにより、今まで伝説と神話によつてのみうめられてきた郷土社会の癡狂の問題が、單に一つ一つの遺跡の内容や構造の追究におけるではなく、砂堆列と集落の形成の問題にありこんでは海岸線の興動を考え、古墳群と集落の関係をとりあげてもそれが地域性の問題として正しく提起されてきたのである。さらにこれらの仕事が中学校の郷土教育としてとりあげられている以上、活動の評価は教育の立場からうけなければならぬ。研究を通じて生徒がどれだけ人間的に成長してきたか、学問の成果とは別に真剣に考えていきたい問題である。柳ヶ坪遺跡の調査に参加した久野寛は、日本史の勉強や原始社会の勉強をして、今までよその國のことのように考へていたが、柳ヶ坪を調べてからは、ほくらの祖先の生活などいうことがわかり、なんども土器の写真をみかえしている」といふ、社山古窯の調査では第一次調査のうちに活動の結果をまとめた概報をだしたが、それにはこんな詩もある。

社山のかまあと

山の中腹にある、社山のかまあと

先生もばくらも目をサラにして
餓やスコツブを勤かす

差摘がすむと、討論がはじまる

・日の音をふきながらみんなが考える

・休・瓦の布団はどうしてだろう

・山茶わんは何枚位つまれているか

・茶わんの間に何かこめてあるのか

・もつと考えて掘ろう

・布団の上にクリスリが流れているから

・焼く前の
粘土のやわらかいいうらだとされるが

・明日はもつと観察しよう (永島順泰)

・社山古窯の調査に参加した生徒二十二人・延べ七十五人ともに、
はならいた作業の思いでは、その明らかにした学問的成果とともに、
私の終生わすれざる所であろう。第一次調査の時の大半の生徒
はすでに社会人として舉立立ちあるいは高等学校に進学しており、そ
の当時の一年生は今や三年生としてクラブ活動の中心となり、現在
知多半島を発賣する愛知用水の工事着工を目前にひかえながら、す
ぐに用水の灌溉を前提とした開拓のために、刻々として消えきつて
いく遺跡の調査にたいして新しい興味をふるいおこしている。次に
調査に参加した生徒諸君の方名を列記して教導を表明するものであ
る。

早川 鉄也・春田 修生・佐橋 隆司・安井 敏弘
森岡 三郎
竹内 宏之・下村 時康・坂 武夫・下村 啓二
岩田栄二郎・藤井 康夫・伊藤 高光・加藤 啓朋
高橋 三郎・若松 茂・大森 達則・安井 稔美
坂 正史・山口 武志

永島 明泰・永井 弘一・及川 弘之・高橋 良輔
森岡 良之・小野 記平・村瀬 洋平・猪屋 健
中西 福司・早川 精訓
成田 久義・鈴木 敏一・鈴木 薩治・横井 道康
石浜 英一・伊藤 保彦
昭和二十一年三月

愛知県知多郡横須賀町史編纂委員会
愛知県知多郡横須賀町横須賀中学校教諭
杉 嶽

章

執筆者紹介

杉崎章

愛知県瀬戸市二谷町東前五丁目

1. 生年月日 大正十一年九月二十八日
2. 出身校 美知第一師範学校
3. 現職 教科研究派遣生（名古屋大学文学部地理学教室）

4. 主著 『中華古墳文化の特質』 日本書古学講座第五卷所収
5. 現住所 愛知県知多郡横須賀町立横須賀中学校

橋崎彰一

大正十四年六月二十七日

京都大学文学部

名古屋大学文学部考古学教室助手

「兵庫県赤穂郡西野山第三号墳」

「名古里市熱田区高城第三号墳の調査」

「中期古墳文化の特質」 日本書古学講座第五卷所収
名古屋市昭和区山陽町四丁目三十一

田中稔

大正十四年二月四日

「名古良家（豊橋市爪郷遺跡調査会）」

名古屋市港区西柳水生宝南二ノ二

久永春男

大正十四年二月四日

日本考古学会員
「二河の貝塚」

「水神平成上古文化」

「東海地域の弥生式土器」 日本書古学講座第四卷所収

4. 3. 1. 4. 3. 1.

5. 4. 2. 5. 4. 3.

1. 2. 1. 2. 1.

編集を終つて

（木下上裕に当つて、町史編纂委員長である白羽町長さんから序文を、委嘱先生（前議会議員加古賀太郎氏）からは御覧の通り表紙題字の揮毫を承うし、頭外の事話であります）

（さて本書、編集を終つてしまつ先きに考へられた事は「内容が、余りに専門的すぎた」と云うくらいで、編集者は最後の校了の口、多数予約申込みをされた方が、本書の販賣を緩らめた時を想起して、思はず頭を抱え「なぜもつと読みやすく」との御叱責を内心覺悟せずには居られなかつた）

（と云つて、筆者各位を云々しようとするものでは決してない、筆者の各先生方には、常々尊敬の意を以て敬慕し、今次御懇意に対しても深甚の謝意を表している次第である）

（要は、本書発刊で『考への張手』をかね、一般の方々も序に御愛読願つておこうと云うなれば、石三島、編集者の懸の深さが原因であつた事を重々お詫びすると共にこの「二兎は追えない」古語を將來の戒めとし、新たに着手する新町史には、備なき謹慎を期し度い、と心願するや切である）

昭和二十一年三月十五日印刷
昭和三十一年一月三十日發行
(井 売 石)

町史別冊

横須賀の遺跡

編集者 馬 戸 栄 吉

発行者 横須賀町史編纂委員会

名前を知る者に贈呈され
本部長官より贈呈され
本部長官より贈呈され

印刷所 横 鉄 印 刷 所

横須賀市役所

横須賀町史編纂委員会
岡 戸 栄 吉

